

長岡市文化財調査報告書

第32冊

1994

長岡市教育委員会

長岡京市文化財調査報告書

第 32 冊

1 9 9 4

長岡京市教育委員会

序 文

今年で3年目に突入した長期不況により、近年にないきびしい社会状況の中、長岡京市では人のいのちが輝く潤いのある豊かな街づくりをめざし、きりつめた予算を最大限活用することを強く刻みつけ様々な行政課題の実現に取り組んできました。

私たちが住んでいるこの街は、市街地のほぼ全域がかつての都「長岡京」に含まれると共に、他にも数多くの文化遺産があり、これらの文化遺産、自然環境を生かしながら調和のとれた開発を進め、緑豊かな自然との触れ合いができる街づくりをしていく必要があろうと強く感じるものです。かけがえのない歴史遺産を守り、現在ある私たちの経済、社会、文化等生活向上の糧であり心のよりどころとしての文化財を守り、研究活用するなかで後世に伝えていくため、本市では文化財におけるさまざまな課題解決に向けてとりくんできました。平成5年度は3年目に突入した不況の影響で発掘調査件数は前年度に比べて少なくなりましたが、その中からも注目すべき成果がありました。教育委員会が国庫補助事業として実施しました長岡京跡ほか発掘調査の中で長岡京時代の鉄造跡が発見されたのもその一つであり、当時の金属加工技術、用途、役所の役割とその関係を解明するための大きな手がかりになるのではないかと期待しているものです。

この報告書では上記の件も含め、国庫補助事業で実施しました1年間の発掘の成果をまとめましたので、長岡京跡解明の資料として又、調和のとれたふるさとの街づくりの資料としてもご活用いただき少しでもお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり何かとご指導いただきました諸先生方並びに関係機関、又発掘調査にご協力、ご理解を賜りました土地所有者、調査地周辺の方々に紙面をお借りして厚くお礼申し上げる次第でございます。

平成6年3月

長岡京市教育委員会

教育長 中小路 脩

凡　　例

1. 本冊は平成5年度に長岡京市教育委員会が国庫補助事業として実施した長岡京跡ほか発掘調査の概要報告である。
2. 上記の調査地は表一のとおりである。その位置は第1図に示した。
3. 長岡京跡の調査次数は、長岡京跡左京、長岡京跡右京ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977)による旧大字小字名をもとにした地区割に従った。
4. 長岡京跡の条坊復原については、近年条坊が從来のものより二町分北にずれることが判明しつつある。本書では新たな有力説である山中 章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号(1992年)の復原に従った。なお、從来の復原は()を付けて示した。
5. 本書で使用する地形分類は、とくに断らない限り『長岡京市域地形分類図』『長岡京市史資料編一』(1991年)によっている。
6. 各調査報告の執筆者は各章のはじめに記した。
7. 本書の編集は長岡京市教育委員会文化スポーツ課文化財係中尾秀正が行った。
8. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には下記の方々のご協力を得た。また、図面のトレースは財団法人長岡京市埋蔵文化財センター白川成明氏に、遺物写真撮影は写房楠華堂 楠本真紀子氏にそれぞれご協力を得た。

[技術補佐員] 池庄司 淳

[調査作業員] 岩岸三郎・中村正雄・麻田安太郎・井本千代治・佐藤昭三・平木秋夫・高瀬嘉一郎・田頭道登・堤 昭治・天野菊次郎・前田 正・今井貴三郎・松本秀和

[調査補助員・整理員] 船戸裕子・橋田邦夫・久保直子・田中智紀・月本一武・坂根巧・森 昌彦・西口秀樹・金子直美・尾崎みづ樹・河合澄子・岡本弓美子・芳山アリ華・樋谷智香・小畠絢子・岩川絢子・田中京子・天白真理子・太田美枝子・奥野久美子

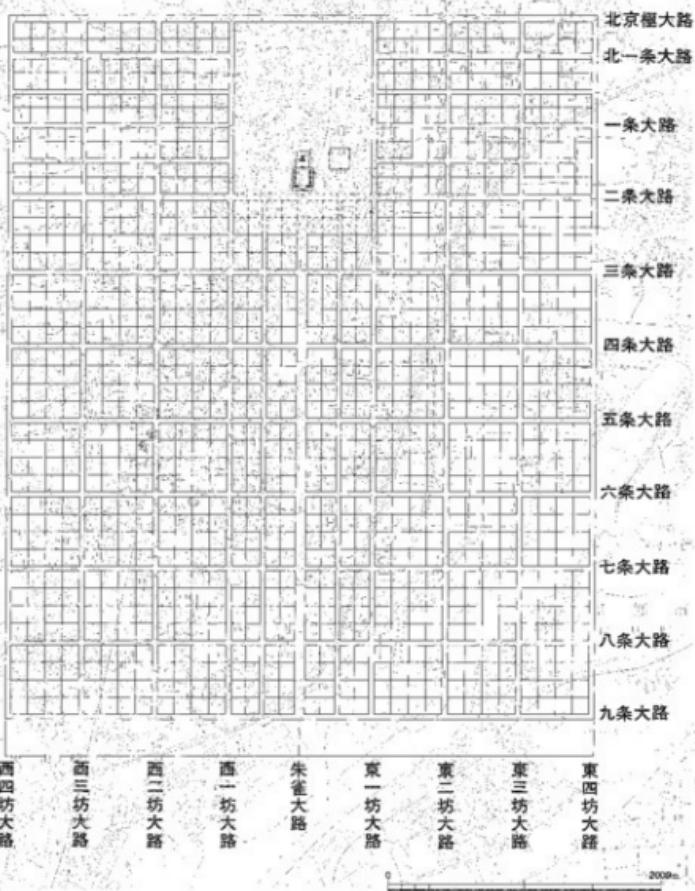
付表1 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所在地	土地所有者	調査期間(現地)	調査面積	備考
長岡京跡右京第443次調査	7ANKSC-5	長岡京市天神一丁目310-7	西小路行進	1993. 8. 23~9. 27	93m ²	開田城ノ内遺跡
長岡京跡右京第447次調査	7ANKNZ-6	長岡京市天神一丁目15-1	五十嵐丈造	1993. 10. 4~10. 31	197m ²	開田城ノ内遺跡
長岡京跡右京第448次調査	7ANMSI-13	長岡京市開田西四丁目405-4	藤井 博一	1993. 10. 14~11. 15	117m ²	開田遺跡
海印寺跡第2次調査	7CKPME-2	長岡京市奥海印寺明神前22	樋口喜久夫	1993. 4. 5~4. 28	184m ²	

第1図 本書報告調査地位置図



長岡京条坊復原図



本文目次

序 文	i
凡 例	ii
第1章 長岡京跡右京第443次調査概要	1
1 はじめ 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物	
5 まとめ	
第2章 長岡京跡右京第447次調査概要	9
1 はじめ 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物	
5 まとめ	
付論 S X 44729-B出土炉壁付着物の検討	
第3章 長岡京跡右京第448次調査概要	29
1 はじめ 2 調査経過 3 検出遺構 4 まとめ	
第4章 海印寺跡第2次調査概要	35
1 はじめ 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物	
5 まとめ	

図 版 目 次

長岡京跡右京第443次（TANKSC-5地区）調査

- | | | |
|------|----------------------|---------------|
| 図版 1 | 1 西調査区全景（東から） | 2 東調査区全景（東から） |
| 図版 2 | 1 柱穴P10瓦器椀出土状況（東から） | |
| | 2 柱穴P10土師器皿出土状況（東から） | |
| | 3 柱穴P7石出土状況（南から） | |
| | 4 柱穴P25石出土状況（東から） | |
| | 5 出土遺物 | |

長岡京跡右京第447次（TANKNZ-6地区）調査

- | | | |
|------|-----------------------------|-----------------------|
| 図版 3 | 1 拡張前の炉跡群と掘立柱建物SB44146（東から） | |
| | 2 調査地全景（南から） | |
| 図版 4 | 1 炉SX44736-A・B検出状況（南西から） | 2 炉跡群完掘状況（北から） |
| 図版 5 | 1 炉SX44729-B（南西から） | 2 炉SX44729-Bの炉体（南西から） |
| 図版 6 | 1 炉SX44729-B出土轆羽口 | |
| | 2 炉SX44736-A出土炉壁 | |
| | 3 炉SX44729-B出土の炉壁と炉体 | |
| 図版 7 | 1 炉SX44729-B・4層出土のガラス質 | |
| | 2 炉SX44729-B・4層出土のスラグ | |
| | 3 炉跡群出土轆羽口 | |
| | 4 試料原体（炉SX44729-B出土） | |
| | 5 分析試料 | |
| 図版 8 | 1 部分Aの拡大 | 2 部分Bの周辺 |
| | 3 部分Bの拡大 | 4 部分Bの鉄の分布 |
| | 5 部分Bの珪素の分布 | |
| | 6 部分Bのカルシウムの分布 | |

長岡京跡右京第448次（TANMSI-13地区）調査

- | | | |
|------|--------------|--------------|
| 図版 9 | 調査地全景（西から） | |
| 図版10 | 1 調査地全景（北から） | 2 調査地全景（東から） |

海印寺跡第2次調査（T C K P M E - 2 地区）調査

- | | | |
|------|-----------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 図版11 | 1 調査地全景（南東から） | 2 調査地全景（南から） |
| 図版12 | 1 南・北トレンチ（北から） | 2 東・西トレンチ（東から） |
| 図版13 | 1 東トレンチ東部（東から） | 2 落ち込みS X 04躰群検出状況（東から） |
| 図版14 | 1 井戸S E11（左）・土坑S K06（右）
3 柱穴P 63（南から）
6 柱穴P 75（東から） | 2 柱穴P 4（南から）
4 柱穴P 69（東から）
7 柱穴P 76（北から）
8 柱穴P 77（北から） |
| 図版15 | 1 落ち込みS X 04出土土器 | 2 井戸S E11出土土器 |
| 図版16 | 1 瓦器風炉
2 須恵器鉢 | 3 井戸S E11出土木製品 |

挿 図 目 次

第1図	本書報告調査地位置図	iii
 長岡京跡右京第443次（TANKSC-5地区）調査		
第2図	発掘調査地位置図（1/5000）	1
第3図	検出遺構図（1/100）	3
第4図	土坑S K47実測図（1/40）	4
第5図	柱穴P10実測図（1/10）	5
第6図	出土遺物実測図（1/4）	7
 長岡京跡右京第447次（TANKNZ-6地区）調査		
第7図	発掘調査地位置図（1/5000）	9
第8図	検出遺構図（1/150）	11
第9図	溝S D44103断面図（1/40）	12
第10図	柵S A44724・19・20平断面図（1/80）	13
第11図	炉S X44709・34平断面図（1/40）	14
第12図	炉S X44729-A～D平断面図（1/40）	15
第13図	炉S X44714・35平断面図（1/40）	16
第14図	炉S X44741平断面図（1/40）	17
第15図	炉S X44736-A・B・26平断面図（1/40）	18
第16図	出土遺物実測図（1/4・1/6）	20
第17図	今回調査の主な遺構配置図（1/300）	22
第18図	調査地周辺の条坊と地形（1/2000）	24
 長岡京跡右京第448次（TANMSI-13地区）調査		
第19図	発掘調査地位置図（1/5000）	29
第20図	南壁土層図（1/100）	30
第21図	A・B・Cライン土層図（1/80）	30
第22図	検出遺構図（1/100）	31
第23図	土坑S K38516（北から）	33

海印寺跡第2次調査（TCKPM-E-2地区）調査

第24図	発掘調査地位置図（1/5000）	35
第25図	調査地周辺図（1/2000）	36
第26図	検出遺構図（1/100）	37
第27図	井戸S E11実測図	40
第28図	柱穴実測図（1/20・1/40）	41
第29図	落ち込みS X04出土土器実測図（1/4）	44
第30図	井戸S E11出土土器実測図（1/4）	44
第31図	その他の遺構出土土器実測図（1/4）	46
第32図	遺構外出土土器実測図（1/4）	47
第33図	瓦・煉瓦実測図（1/4）	48
第34図	井戸S E11出土木製品実測図（1/4）	49
第35図	石製品実測図（1/2）	50

付 表 目 次

付表 1	本書報告調査一覧表	ii
付表 2	遺物観察一覧表	52

第1章 長岡京跡右京第443次(7 ANKSC-5地区)調査概要

— 長岡市跡右衛門六条三坊二町・門田城ノ内遺跡・門田城跡 —

1 はじめに

- 1 本報告は、1993年8月23日から9月27日まで、長岡京市天神一丁目310-7において実施した長岡京跡右京六条三坊二町（五条三坊四町）推定地、開田城ノ内遺跡、開田城跡の発掘調査に関するものである。
 - 2 本調査地は、推定長岡京西市の北西部にあたり、その所在を検討する上で重要な地点と考えられた。本調査は、当地に小面積の開発行為が計画されたため、当遺跡地の重要性に鑑み事前調査を行い、開発に対し遺跡保護の適切な指導を行うための資料作成を目的とするものである。
 - 3 調査は、平成5年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり実施した。調査員は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに派遣を依頼し、中島皆夫が現地を担当した。
 - 4 調査実施にあたり、土地所有者である西小路行雄氏をはじめ、近隣の方々のご協力を得た。
 - 5 調査後の遺物実測や図面整理は、おもに中島・坂根 巧・橋田邦夫・岡本弓美子が行った。
 - 6 本報告の執筆ならびに編集は、中島が行った。



第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査経過

2 調査経過

調査地周辺は、阪急長岡天神駅の西約0.2kmにありながら、なお田圃が点在する地区である。調査地は、南東側の氾濫原に向って傾斜する緩扇状地上に立地し、付近の標高は24m前後を測る。調査地の南数mでは、「長岡市史」に伴うアコアボーリング調査が行われ、標高約23mから約13mまで砂礫を中心とする堆積層で覆われていることが明らかにされた。⁽³⁾

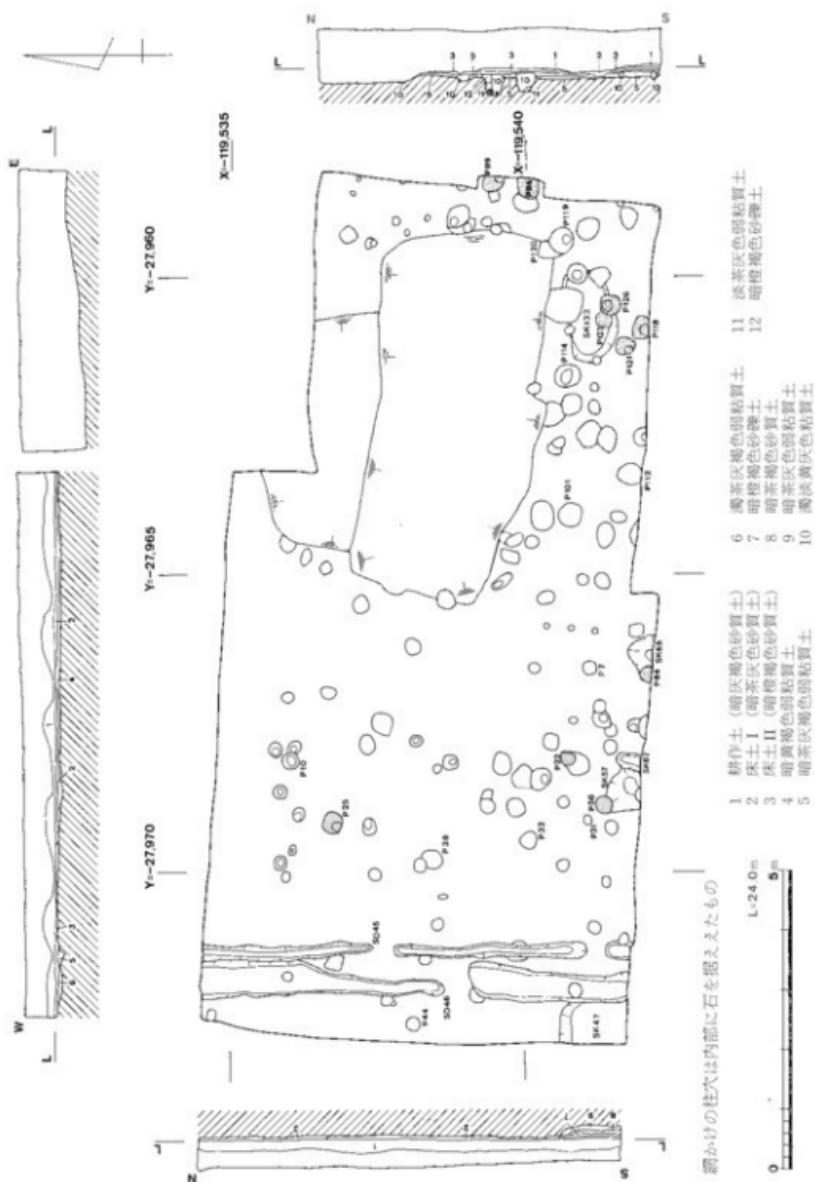
調査地は、弥生時代～鎌倉時代までの複合遺跡である開田城ノ内遺跡、戦国時代に西岡の国人中小路氏が築いた城館と考えられる開田城跡の西辺に位置する。また、長岡京条坊復原では右京六条三坊二町に推定される場所である。長岡京東西市推定地の一つに、「棚次」「綾取」などの小字名から二坊大路と六条々間小路（五条大路）の交差点以北4町を充てる説があり、この場合、当地は西市の北西部に位置することになる。

調査は、東西に長い調査地の西半部に、東西約8m、南北約7mの西調査区を設定し、重機によって床土までを除去した後人力作業に切り替えて行った。西調査区内で柱穴等が多数検出されたため、遺構の広がりを確認することを目的に東半部の反転調査が企画され、東西約6m、南北約6mの東調査区の調査を、9月13日から重機による西調査区の埋め戻しに引き続いて行った。なお、本調査の総面積は、東西の調査区を若干重ねて設定したため92.5m²となった。また、東西調査区の別が有意なものでないため、本文中では1個の調査区として記述した。

3 検出遺構

調査区の層序は、現地表下に0.5m程度の厚さで盛土、耕作土、床土が堆積し、海拔約24mで黄褐色粘質土および茶褐色砂礫土の地山が現れる。地山面の低い調査区南東部には、古墳時代後期～長岡京期、鎌倉時代～江戸時代の遺物を含む茶灰色弱粘質土層が堆積していた。南東部以外で確認されないのは、江戸時代以降の水田化に伴い削平を受けたためであろう。遺構検出作業を同層上面でも試みたが遺構は検出されず、以下の遺構は全て地山面で検出された。

検出した遺構は、調査面積が狭小であったにもかかわらず、溝2条、土坑5基、柱穴125基と多い。しかし、検出遺構の大部分を占める柱穴群には規則的な配列が認められず、建物などの構造物として復原することができない。また、調査区の中央から北東部には現代攪乱坑が存在したため、柱穴群の把握は更に困難なものとなった。各遺構の埋土に灰色、茶褐色、茶灰色、灰褐色、黃灰色、黃褐色、黒褐色があって、このうち黒褐色埋土の遺構とそれ以外の遺構には出土遺物などより時期差が認められる。黒褐色埋土以外の遺構は鎌倉時代以降と考えられるもので、これを第II期とした。黒褐色埋土の遺構には、土坑SK132、柱穴P31・32・38・101・114・119・120がある。奈良時代～平安時代中期の遺構であり、これらを第I期とした。なお、正式な遺構番号は調査次数443十番号であるが、ここでは次数を省略した番号で表記した。



第3図 検出遺構図 (1/100)

4 検出遺構

(1) 第II期の遺構

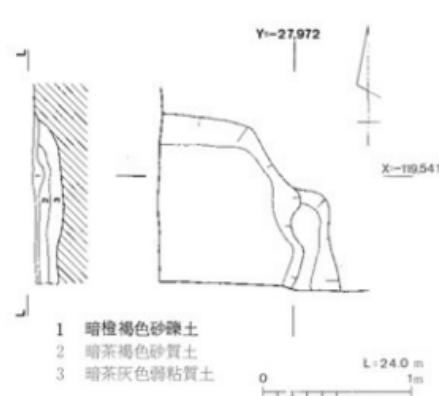
第II期の遺構には、溝2条、土坑4基、柱穴118基がある。このうち、全体の7割を超える遺構からは遺物が出土しており、13世紀末から14世紀前半の瓦器片類が目立つ。なお、出土遺物がない遺構についても、重複関係、埋土等から当期に属するものと考える。

溝S D45・46（第3図） 調査区の西辺において検出した、重複関係を有する2条の南北溝である。両溝とも部分的に途切れるが、さらに調査区域外の南と北へ延びる。より新しい東側の溝S D45は、幅15cm前後、深さ約10cmで細長く掘られる。一方、幅広の溝S D46は、最大幅約60cmで深さ10cm程度を測る。2条の溝は当期の重複する遺構を切り、今回検出した遺構のなかで最も新しいものと考えたが、出土遺物に15世紀以降のものがなく確証を得ていない。

土坑SK 47（第3・4図） 調査区南西隅で検出した土坑で、溝SD46に切られている。南と西が調査区域外へ広がるため全容を確認できなかったが、東西・南北とも1.2m以上、深さは最も深い部分で検出面から約20cmを測る。3層からなる埋土のうち、第2層には13世紀末頃から14世紀前半の瓦器碗など、比較的多くの遺物が含まれていた。

土坑SK 57・67（第3図） 重複する2基の土坑で、柱穴P56・88に切られる土坑SK57がより新しい。2基は調査区西側の南辺に接して検出されたために全容を確認できなかったが、土坑SK57を東西0.9m、深さ約19cmの四角形状に、一方の土坑SK67を南北0.4m以上、深さ約17cmの小判形に復原できるものと考える。出土遺物中に両者の時期差を明確に示す遺物ではなく、土器盤皿、瓦器碗・皿などより、13世紀の中頃に相次いで掘削されたと考えられる。

土坑SK 65（第3図） 柱穴P64に切られる土坑SK65も、調査区中央の南辺に接して検出したために全容を確認できなかった。東西0.7m、深さ約25cmを測り、不整円形を呈すると考えられる。出土遺物には瓦器の細片などがあるが、当該期の他の土坑に比べて少ない。



第4図 土坑SK 47実測図 (1/40)

柱穴群（第3図） 調査区のほぼ全域で当期の柱穴を確認した。ここでは柱穴群を一括して記述した後、完形土器が出た柱穴、内部に石を据えた礎石柱穴を改めて記述する。

柱穴の平面形状には、円形、楕円形、方形、不整形があり、このうち前二者の割合が高い。規模は、大半が直徑ないし長軸25~40cmであったが、10cm未満の杭状のものと40cmを超えるものが、それぞれ10基存在する。いずれも深さ40cmまでであり、中でも20cm未満のものが多い。

柱抜き取り穴を検出した柱穴は、調査区西側と東辺を中心に24基を数えた。抜き取り穴は円形であり直径15~20cmを測る。遺物は柱穴118基のうち78基から出土した。瓦器を伴う柱穴が多く、14世紀以降のものと考えられる。

柱穴P10 (第5図、図版2-1・2) 調査区の北西で検出した柱穴P10は、直径約28cm、深さ約37cmを測る。柱穴には完形の瓦器椀と土師器皿が口縁部を上に向けて埋められていた。埋土中からは、この他にも土師器・瓦器の破片が出土している。

礎石柱穴 (第3図、図版2-3・4) 柱穴P7・22・25・56・64・89・94・118・126・127・131は内部に長軸15cm前後の石を据えた礎石柱穴である。石は平坦面を上方に向け据えられる。各柱穴の時期は、13世紀末から14世紀前半の瓦器を下限とする出土遺物が示す時期と考えられるが、他遺構との重複関係を考慮すれば、より新しくする必要があろう。

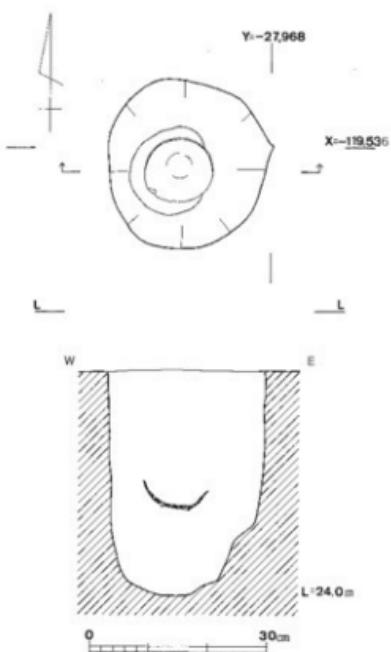
(2) 第I期の遺構

第I期は、奈良時代～平安時代中期と考えられる時期の遺構で、これには土坑SK132、柱穴P31・32・38・101・114・119がある。

柱穴P31 (第3図) 黒褐色埋土の遺構で、唯一平安時代の遺物を含んでいた遺構である。長軸15cm、深さ10cm前後と小規模で、柱抜き取り穴も検出していない。

柱穴P101・114・119 (第3図) 調査区の南東部で、真東西方向に約2.4mの間隔で並ぶ3基の柱穴を検出した。各柱穴は、一辺35cm前後の隅円方形に近い形状を呈し、深さも約20cmに揃う。柱穴P114と柱穴P119では、それぞれ長軸20cmと直径15cmの柱抜き取り穴を検出した。各柱穴からは長岡京期の土師器・須恵器が出土している。柵列ないし掘立柱建物の一部とも考えられるが、調査区域内では確認できなかった。

土坑SK132 (第3図) 柱穴P114・119の間で、深さ約30cm、長軸1.5m、短軸0.8mの小判形を呈する土坑を検出した。土坑は重複する第II期の柱穴7基に切られている。埋土からは、土師器・須恵器の破片が出土した。このうち唯一遺物の時期決定が行えるものは、内面に放射状暗文を施した土師器の食器であり、奈良時代後半頃と考えられる。



第5図 柱穴P10実測図 (1/10)

4 出 土 遺 物

今回の調査では、遺物が整理箱にして、3箱程度出土した。出土遺物には、古墳時代から江戸時代までのものがあるが、時期的な遺構の過多に比例し、第II期のなかでも鎌倉時代後期のものが多い。出土遺物のうち大部分を占める土器類は、柱穴P10から出土した完形品2点を除くと細片、破片であった。このため、図示することができた遺物の量は、総出土量に比べると少量である。

第I期以前の遺物（図版2-5） 包含層および第I・II期の遺構に混じって、古墳時代の須恵器が出土している。1は古墳時代の壺口縁部ないし高杯脚部と考えられる破片で、内面の灰の付着が顕著であることから壺とした。胎土は精良で、色調は内外面の暗灰褐色に挿まれた部分が淡い黒褐色を呈する。2も古墳時代の壺口縁部と考えられるが、色調は淡灰色であった。1は第II期の柱穴P131から、2は第I期の柱穴P119から出土した。この他にも、主に包含層からではあるが、古墳時代後期の須恵器杯身・蓋が出土している。

第I期の遺物（第6図、図版2-5） 遺物の出土量は当期までに比べて増加するが、遺構に伴って出土した遺物は少ない。当期には奈良時代、長岡京期、平安時代の遺物が含まれ、このうち長岡京期の遺物が目立った。

奈良時代の遺物には、土坑S K132から出土した土師器皿（3）がある。内面に1cmあたり5本の放射状暗文が施されることから、平城宮III・IV期頃のものと考えられる。

長岡京期の遺物には、土師器椀・甕（6）、須恵器杯A（4）・杯B（5）・杯B蓋・甕、製塙土器、平瓦（7）がある。4は口径12.8cm、器高3.2cmに復原され、長岡京期の法量分布で杯A IIにあたる。5・6は、当期の柱穴P114と柱穴P119から出土した。5は口径11cm前後の杯B Iになるとされる。6は口縁端部を内側に強く巻き込み、口縁部内面に粗く腰の強い刷毛目が施された、長岡京期に通有の甕である。7は硬質に焼成されており、凹面の布目痕と凸面の縦縄叩きを明瞭に残している。

平安時代の遺物には、土師器皿、須恵器椀（8）、黒色土器椀、綠釉陶器、灰釉陶器がある。8は、柱穴P31から出土した。底径6cm程度の割り出し高台を持つもので、内外面ともに磨き調整は認められない。平安時代中期までの遺物と考えられる。黒色土器椀は内外面を黒色化する黒色土器B類、土師器皿は所謂「て」の字状口縁を有するものである。なお、綠釉陶器、灰釉陶器の器形は、破片が小片であったため、判然としない。

第II期の遺物（第6図、図版2-5） 当期の遺物量は、鎌倉時代後期の遺物を中心に飛躍的な増加を示す。また土坑、柱穴などの遺構に伴い出土する遺物が多いのも、当期を特徴付ける傾向である。土師器皿（11・12・17）・羽釜（20）、須恵器鉢（19）、瓦器椀（9・10・13～16）・皿・羽釜（18）・三足羽釜・鍋などがある。

瓦器椀(9・10)は、礎石柱穴などの柱穴群から出土する瓦器椀に比べて古相を示すもので、包含層と土坑SK67から出土した。9は口径14.2cm、器高4.5cmを測り、断面三角形の細い高台を持つ。内面に箆磨きが施されていたと考えられるが確認できなかった。10は口径13.2cmで、内面には粗い箆磨きが施される。9・10に見られる法量、高台の形態、内外面の調整法は、橋本氏の中世土器編年のIII-2期にほぼ相当する特徴である。

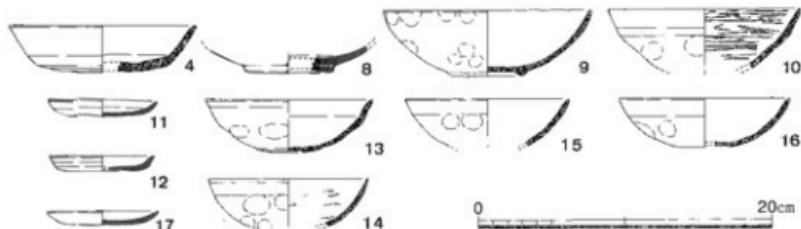
土師器皿は、いずれも口径7.5cm、器高1cm前後を測る。皿の形態は、口縁部が強いナデ調整のために上方へ折り曲げられたもの(11・12)と、口縁部と底部の境界が判然としないもの(17)があり、前者は柱穴P10、後者は土坑SK57から出土した。

土師器羽釜は、正確な数値が得られなかったものの口径30cm程度の大型品と考えられ、器壁には幅4cm程度の鍔がほぼ水平に貼り付けられている。鍔の下面は、二次焼成を受けて橙灰色に変色していた。

須恵器鉢も破片であり、法量などは不明である。口縁部の形態は、端部付近が上方に折り曲げるようにならって成形されるため、断面三角形状を呈している。土師器羽釜、須恵器鉢は、いずれも柱穴P96から出土した。

瓦器椀(13~16)は、9・10の瓦器椀に比べより新しい時期の特徴を示す。13・14は完形の土師器皿(11)が埋められていた柱穴P10から、15・16は柱穴P112から出土した。いずれも、口径11cm前後、器高約3.5cmを測り、13では粘土紐をすり付けただけの高台が見られる。体部外面は成形段階の指押え痕を残し、内面調整はナデのみで終えるもの(13・15・16)と瓦器椀(10)より粗い箆磨きを施すもの(14)がある。また、口縁部の形態には内外面の強いナデ調整によって外反するもの(13)と、他の直線的に終るものに分けることができる。器形、法量、調整など、これらの遺物には橋本氏の中世土器編年のIV期に相当する特徴が認められた。

瓦器羽釜(18)は、小片のため全体の形状、法量などが明らかでない。口縁部の形態は内面が直線的であるのに対し、外面は端部から外傾する端面を成す。口縁端部から約2cm下に、幅約1cmほどの鍔が貼り付けられている。18は柱穴P44から出土した。瓦器の煮沸具には、この羽釜(18)のほか、三足羽釜・鍋がある。



第6図 出土遺物実測図 (1/4)

5 まとめ

調査では長岡京期以降の土坑、柱穴を多数検出したが、目標としていた長岡京西市の解明につながるような遺構、遺物は、小面積調査のもつ様々な制約もあり確認することが出来なかつた。しかし、「市」をはじめ広大な長岡京の姿を明らかにするためには、京城内で行われる全ての調査、そして多数の資料を多角的に検討する必要がある。今回の調査結果は、その膨大な作業の一角を占めるものであり、今後も同様な調査が引き続き行われ、より客観的な判断材料となることが望まれる。

今回の調査では、古墳時代以前の開田城ノ内遺跡に関連する遺物を若干量採集しただけで、その姿を明らかにすることが出来なかつた。また、前記のように長岡京期前後の様子についても、土坑、柱穴を数基確認したが、現状では建物の配置など土地利用の状況に迫ることが出来ない。

今回の調査で最も注目されるのは、中世以降の開田城ノ内遺跡に関連する成果である。当地では13世紀末から14世紀前半までの遺物を含む、土坑と多数の柱穴を検出した。当期の遺構、遺物の密度は13世紀以前および15世紀以降に比べ非常に高く、この間当地が屋敷地として利用されていたことを暗示させる。14世紀前半以降の状況はよく分からぬが、礎石柱穴が多数存在しており、屋敷地としての利用が続いているとも考えられる。

注1) この他にも、森田祥子・森 昌彦・岩川鉢子・太田美枝子・奥野久美子・河合澄子・田中京子の協力を得た。

2) 植村善博・日下雅義「自然環境」『長岡京市史 資料編一 付図』1991年

3) 中山修一「長岡京に関連する地名」『地理』7月号 地名研究協議会 1982年

第2章 長岡京跡右京第447次(7 ANK NZ-6 地区)調査概要

—— 長岡京跡右京六条三坊二町・開田城ノ内遺跡 ——

1 はじめに

- 1 本報告は、1993年10月4日から10月31日まで、長岡京市天神一丁目15-1において実施した長岡京跡右京六条三坊二町（五条三坊四町）および開田城ノ内遺跡に関するものである。
- 2 本調査は、8月2日より実施していた右京第441次調査の調査対象地外から重要遺構が検出されたため、急きょ実施したもので、調査面積は197m²である。
- 3 調査は、平成5年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となって実施した。現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、小田桐淳が担当した。
- 4 調査の実施にあたっては、土地所有者の五十嵐丈造氏をはじめ、近隣住民に数々のご援助をいただいた。また広島大学名譽教授潮見浩氏、兵庫県立武庫庄高等学校教諭土佐雅彦氏からは多くのご指導・ご助言をいただいた。
- 5 調査後の図面・遺物整理は、横田邦夫をはじめ多くの方々の協力を得た。^①
- 6 本報告の執筆および編集は小田桐が行った。また炉壁付着物の科学分析を京都芸術短期大



第7図 発掘調査位置図 (1/5000)

学講師内田俊秀氏に依頼し、その分析結果を付論として寄稿していただいた。

2 調査経過

当地は東西26m、南北66mの規模をもつ水田であったが、ここに共同住宅を建設する計画がおこり、右京第441次調査として緊急調査を実施した。⁽²⁾ この調査では近世の大規模な溝や長岡京期の掘立柱建物、古墳時代の竪穴住居など多くの遺構が確認された。調査の途中、建物や住居の全容を確認するため調査区の拡張をそれぞれ行ったところ、拡張区の一つから炉壁・鉄滓が大量に混入している土坑状の輪郭が新たに多数検出され、製鉄炉群になることが予想された。

長岡京市内においてはこれまで鞴羽口や炉壁片などの製鉄関係の遺物は出土しているが、遺構については未検出であった。今回右京第441次調査では、炭焼き窯と考えられる遺構も検出されており、長岡京期の掘立柱建物もこの製鉄炉と関連するものとも考えられた。しかし、検出場所が建物建設予定地外であるため、市教育委員会では遺構の重要性を鑑みて、国庫補助金を導入し、右京第447次調査としてこの部分の調査を実施することにした。さらに遺構の性格を明らかにするため、広島大学名誉教授でたたら研究会会長の潮見浩氏とたたら研究会員の土佐雅彦氏に現地でのご指導をいただいた。その結果、出土している炉壁が鋳造炉のものであるとのご指摘を受けた。

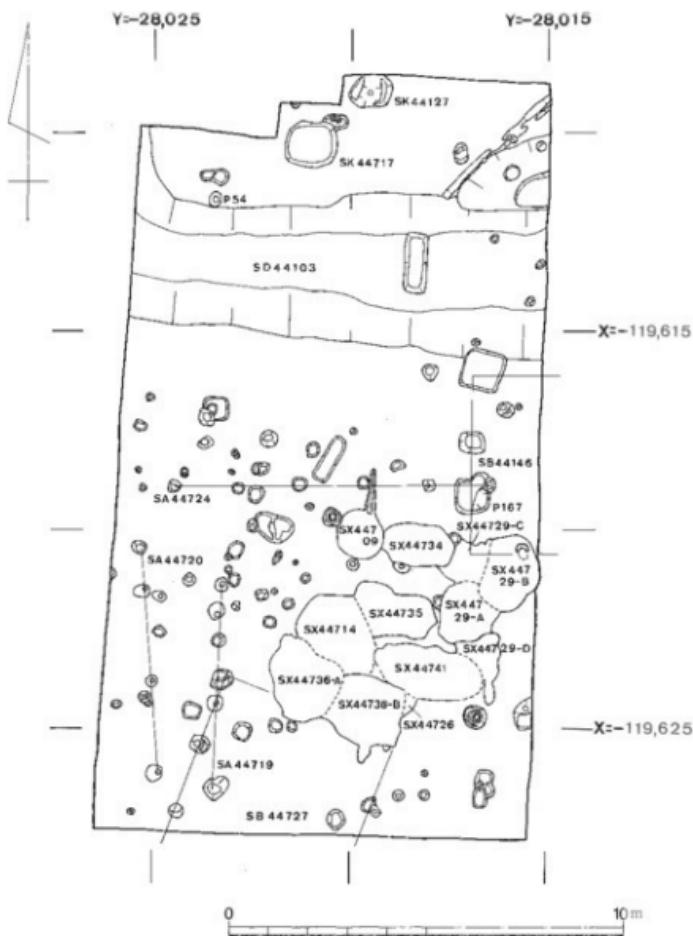
調査面積は右京第441次調査で742m²、右京第447次調査で197m²の合計939m²をこの敷地内で調査したことになる。

調査地は長岡京跡右京六条三坊二町にあたるとともに、弥生時代後期から鎌倉時代にかけての遺跡である開田城ノ内遺跡の範囲内にも想定されている所である。当地は日下雅義氏の地形分類によれば緩扁状地上に立地しており、敷地の北と南には東西方向の開析谷が走っている。⁽³⁾

周辺の調査では、本調査地の西80mで行った右京第109次調査で傾斜面に捨てられた炉壁片が長岡京期の土器と共に大量に出土しており、長岡京の官営工房が周辺に存在する可能性が指摘されていた。また東70mの右京第90・379次調査では西二坊大路や奈良時代の掘立柱建物、古墳時代の竪穴住居、方形周溝墓、弥生時代の土坑などが検出されており、長岡京条坊と開田城ノ内遺跡の一角が明らかになっている。⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾

調査地の層序は、基本的には15cmほどの耕作土を除去するとすぐに黄灰色粘質土の地山層となり、各時期の遺構は全て同一面で検出された。調査区の南端では北西—南東方向で南に傾斜しており、ここには近世の遺物包含層が堆積していた。これは敷地南隣りに残る水田の段と対応しており、これが日下氏復原の開析谷の北肩に該当するものと考えられる。

右京第447次調査区でも耕作土を除去するとすでに炉壁が顔を出しているという状況であった。遺構検出面の海拔は24.1mほどである。



第8図 検出遺構図 (1/150)

右京第447次調査区での主な検出遺構は近世の大規模な溝と長岡京期を中心とした時期と考えられる炉跡群、ピット群である。ほかに長岡京期の掘立柱建物、炭焼き窯、古墳時代の竪穴住居、弥生時代の竪穴住居の一部も本調査区に入っているが、これらの詳細および最終的なまとめは右京第441次調査報告に譲る。

3 検出遺構

今回主に報告する右京第447次調査区で検出された遺構は、近世の大規模な溝1条と、長岡京期を中心とした鉄造関連施設と考えられる掘立柱建物と柵、炉跡群である。

近世の遺構

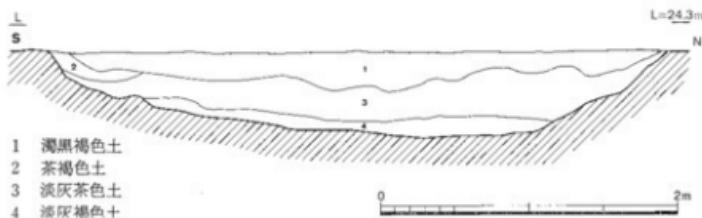
溝S D44103は幅3~4.1m、深さ0.55mほどの真東西溝で、敷地西端で北へ直角に曲がる。東西部分は20mにわたって検出できた。埋土は大別して3層から埋まっている。その内の最上層（第9図・1層）は土器の小片を多く含む濁った粘質土で、人為的に埋められた層である。この層からはキセルが数点出土しており、また国産磁器片も確実に伴うことから、埋没したのが近世であることは疑いないが、量は非常に少ない。ほとんどの遺物は古墳時代後期、奈良時代、長岡京期、平安時代の土器小片である。従ってこの溝が開削された時期を出土遺物から探ることはできない。しかし、中世の遺構、特に瓦器碗を伴う時期はほとんど検出されていないこと、下層の遺物量が非常に少ないとからあまり長期間存在していたとは考えにくいことなどから、近世の範疇でとらえておきたい。

長岡京期から平安時代にかけての遺構

当地で検出された遺構はいずれも時期決定が非常に困難な状況である。柱穴や炉跡の遺物は小片ばかりで、時期の判明するものは古墳時代後期の須恵器片のみといつても過言ではない。このような状況で、時期決定の判断としては遺構配列に主眼を置いて検討した。

掘立柱建物S B44146と柵S A44724はいずれも正方位を向いており、長岡京期の可能性を持っている。両者は切り合っており、S A44724の方が新しい。

S B44146は2間×3間の南北棟で、右京第447次調査区では西柱列のみ検出した。時期を検討する遺物として、P167掘形上面から奈良時代の杯Bが1点出土している。しかし右京第441次調査区のS B44104と南北中軸をほぼ揃えて建てられていることや、正方位を向くことから長岡京期の建物として考える。この建物はS X44729-Cに切られている。しかし柱掘形中に炉壁片が混入していることから、当地で鉄造が始まった後の建物であることがわかる。



第9図 溝S D44103断面図 (1/40)

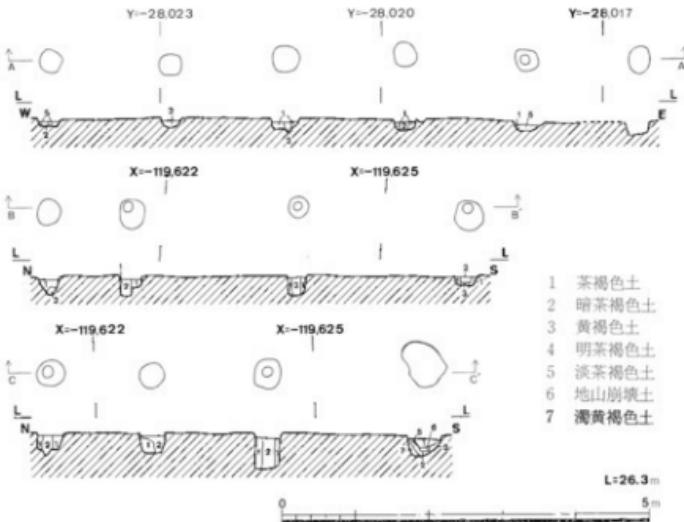
S A 44724は柱間1.6m等間の東西柵列で5間分確認した。この柵を東へ延長すると、右京第441次調査区のS B 44112の北辺から30cmほど南を通るもののはほぼ一致する。このように、これらの遺構は一連の配置のもとに建てられた長岡京期のものとして理解される。

一方、掘立柱建物S B 44727は規模が3間×4間で、方位が北で東に振る建物である。この建物もS X 47736 A・Bに切られていて、なおかつ柱穴から炉壁片が出土している。柱間は梁間1.5m等間、桁行1.75m等間である。この建物は切り合い関係と出土遺物からは炉の操業中の一期期になるが、長岡京期とするには方位が振れる点で問題が残る。

柵S A 44719、S A 44720など炉跡の西側には無数の柱穴が存在する。埋土は全て同様のもので、出土遺物に古代以降のものはない。東西、南北いずれも2間ほどの不規則な並びは確認できるものの、方位が振れるなど確実に柵や掘立柱建物として認め得るものは少ない。まとまりとしては東に接する炉跡群との関係で、炉の西を画るように南北方向の小規模な柵を次々建てた結果として考えられる。また後述する炉の覆屋の柱穴が存在する可能性も考えられる。

S A 44719は3間の柵列で、方位が北で東に振れている。柱間は北2間が1.5m等間、南1間が2.1mほどである。S A 44720も3間の柵列であるが、方位は北で西に振れている。柱間は南2間は2.3m等間、北1間が1.0mである。

炉跡群は東西6m南北7mほどの範囲に12基が切り合って構築されている。形状は円形ないし長円形を呈し、土坑状に掘り窪められている。底に黒灰色粘土と地山の黄灰色粘質土を混ぜた土で床を張り固めたものも半数ほどある。また前の遺構と重なって構築するときには地山の



第10図 柵S A 44724・19・20平面面図 (1/80)

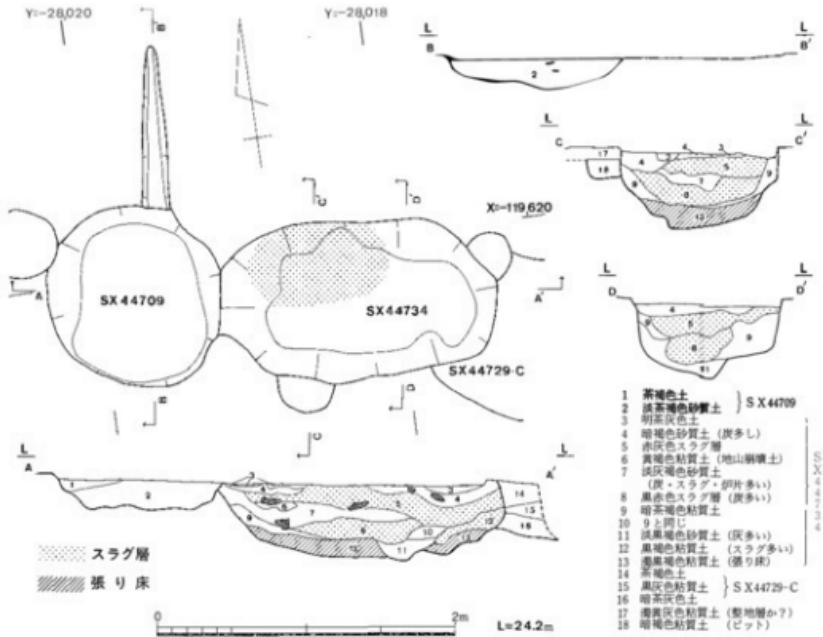
14 検出遺構

層を張り付けて肩を造るものもある。これら一般的な土坑との相異点と、唯一炉が現状で残存していたS X44729-Aの例から、全て炉の遺構であると判断した。炉としての機能が消失した時点での廃滓場として埋められている。

炉S X44709は直径1.2mの円形で深さ0.2mを測る。他と比較して浅いもので、炉にはならない可能性もある。北に取り付く浅い溝は埋土がS X44709上面の一部に薄く被っており、別遺構になるものと考えられる。S X44709の埋土は、一部に茶褐色土(第11図1層)が認められ、この中に炉の大型破片が集まっていた。

炉S X44734は西はS X44709に切られるが、東ではS X44729-Cを切る長円形の炉で、長さ1.9m幅約1m、深さ0.55mほどの規模をもつ。底には10cmの厚さで床が張られている。この張り床は黒褐色粘質土層で堅く締まっている。埋土はスラグが集まった堆積と、灰が多く含まれる砂質土の互層となっており、いずれの層にも炉片や炭片が多く混入している。基本的に他の炉でも堆積状況は同じである。

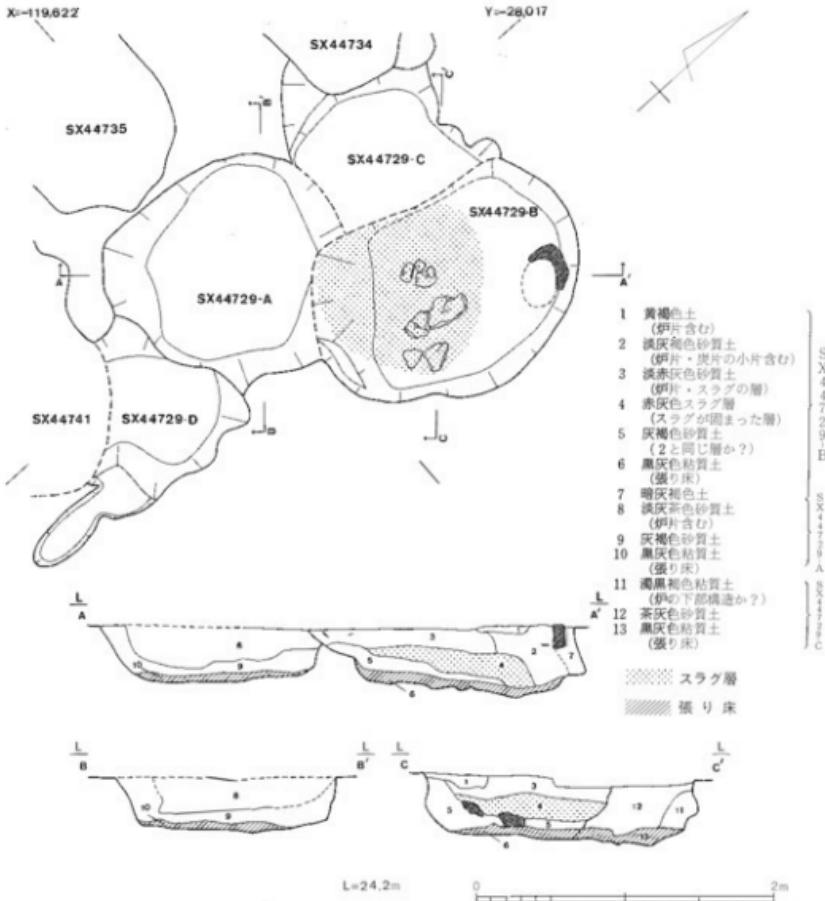
炉S X44729-Aは直径1.6mほどの不整円形をした土坑で、深さ0.37mほどを測る。底には6cmの厚さで張り床が認められる。この張り床は黒灰色粘質土と地山の黄灰色粘質土が混じたもので、非常に堅く締まっている。S X44729-Cを切り、S X44729-Bに切られている。ま



第11図 炉S X44709・34断面図 (1/40)

たSX44729-Dとも切り合い関係にあるが、埋土が非常に似通っているため確認するに至らなかった。

炉SX44729-Bは長径1.85m短径1.3mほどの不整円形で、SX44729-AおよびSX44709-Cを切っている。深さは0.4mほどを測る。北西隅のやや広がった部分に炉体の一部が残存していた。この破片は内面の長径45cm位の梢円形で、厚さは8cmほどのものである。炉壁外面に接する埋土は2cmほどにわたって焼成を受け赤変している。この施設の掘形底面には厚さ6cmにわたる張り床があり、炉片下端から張り床まで17cmほど浮いている状態であった。この炉と第12図断面7層が機能時の状態で、他の1~5層は炉を破碎した後に廃滓場として使用された



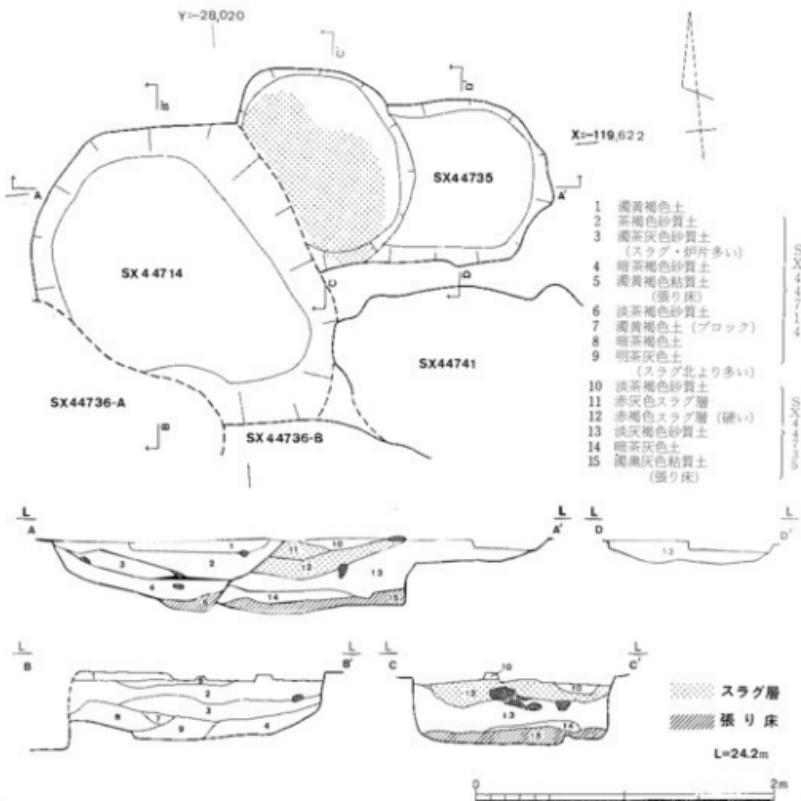
第12図 炉SX44729-A~D平面図(1/40)

状況を物語っていると考えられる。7層を除去した遺構の立ち上がりは、炉のあった部分周辺のみ奥にえぐれ込んでいる。

炉S X 44729-CはS X 44729-BとS X 44734とに切られているもので、規模は長径1.3m以上、短径1.1m、深さ0.42mで張り床をもつ。

炉S X 44729-Dは直径1.1mほどで深さ0.2mの規模をもつ。埋土は淡茶灰色砂質土の単一層で、S X 44709とよく似ているが、この遺構はS X 44729-A・Bなどと同様張り床をもっている。S X 44729-A、S X 44741と切り合っているが、類似した埋土で前後関係を確認することができなかった。

炉S X 44714は長径2.4m、短径1.8mほどで深さ0.45mの楕円形を呈すると思われる土坑で、S X 44736-A、Bに切られ、S X 44735を切っている。底面の最深部のみに張り床が認められ



第13図 炉S X 44714・35平面図 (1/40)

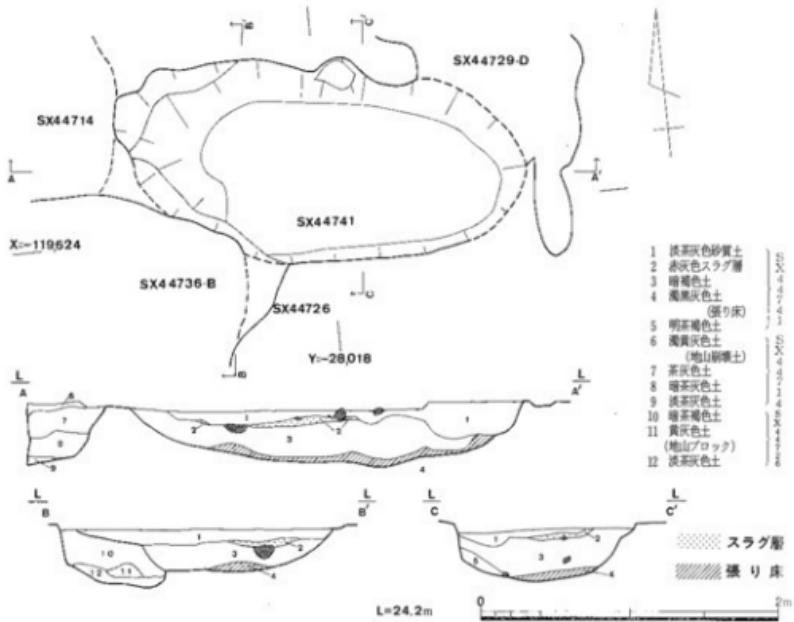
る。上面南側には地山崩壊土が堆積しており（第13図1層）、S X44736-Aを構築したときに張られた層である。

炉S X44735は東西が2.1mの長円形プランであったが、掘り下げていくと深さ15cmほどで底になる東半分と、長径1.4m前後、短径1.2mの楕円形で0.5mの深さになる西側とに分かれる。断面観察からは切り合いは認められないが、S X44729-Dなどの例と共に遺構の形態を検討する余地が残る。西側の深いほうには底に張り床が10cmの厚さで敷かれているが、東側の浅いほうには認められない。

炉S X44741は長径2.8m、短径1.3m、深さ0.4mの長円形を呈した土坑である。S X44736-Bに切られているほか、S X44729-Dとも切り合い関係にある。底面には張り床が認められる。

炉S X44736-Aは直径1.7m～1.9mほどの不整円形の土坑で深さは0.4mを測る。S X44714、S X44736-Bを切っている。底面西北の一部に張り床がされており、この張り床の上から土坑の肩にかけて地山混じりの層が張り付けられている（第15図17層）。この部分はS X44714との切り合い部にあたり、壁を補強したものとして理解されるが、炉を設置するための作業とも考えられる。埋土上方には炉壁の大型破片が多く出土している。

炉S X44736-Bは直径1.7m～2mほどの不整円形で深さは0.55mを測る。S X44741、S X



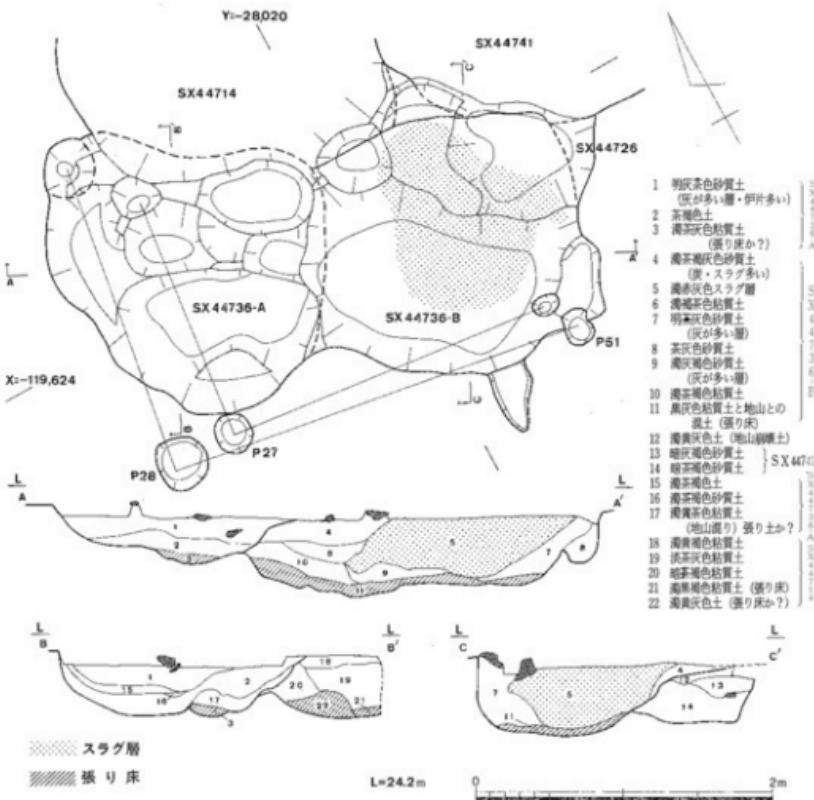
第14図 炉S X44741平面面図 (1/40)

18 検出遺構

44714、SX44726を切り、SX44736-Aに切られている。底面には張り床が8cmほどの厚さで敷かれている。スラグ層の厚さはこの炉が最も厚い。

炉SX44726はSX44736-BやSX44741などに切られてほとんど残存していない。かろうじて下部が残っており、底部の規模が下端で長径1.4m、短径0.6mほどになる。これはSX44736-BやSX44734と同じくらいの規模であることから、この遺構も炉になると考えられる。

以上が炉跡群の概要であるが、ほかにこれらの炉に関連すると考えられるものに柱穴がある。SX44736-Bを切る柱穴P51やP27、P28はSX44736-Aの北西肩部やSX44736-B南東肩部にあるピット状の窪みと対応して2組の直角に曲がる配列関係にある。可能性としてSX44736-Aに付属する覆屋ないしは屏としての機能を考えられるが、ほかの炉では柱穴が数基あるものの並びとして確認するに至っていない。



第15図 炉SX44736-A・B・26平面断図 (1/40)

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナに98箱分にのぼっているが、S D 44103と炉跡群から出土したものがその大半を占める。炉跡群出土のものはほとんどがスラグと炉壁片であり、数少ない土器類も二次堆積と考えられる古墳時代後期の須恵器が多く、遺構の時期を決定できる遺物がほとんどない状態であった。しかし炉の壁体およびスラグ類の大量出土は、検出例の少ない古代の鉄器遺構の研究上貴重な資料といえよう。

溝 S D 44103出土遺物

古墳時代須恵器、平安時代綠釉陶器などの小片が多く出土しているが、図示できるものはほとんどない。第16図4は宝相華文軒平瓦で12世紀に入る時期のものと考えられる。⁽⁸⁾ 当地周辺では、同種あるいは同時期の瓦はまだ出土したことがない。

炉跡群出土遺物

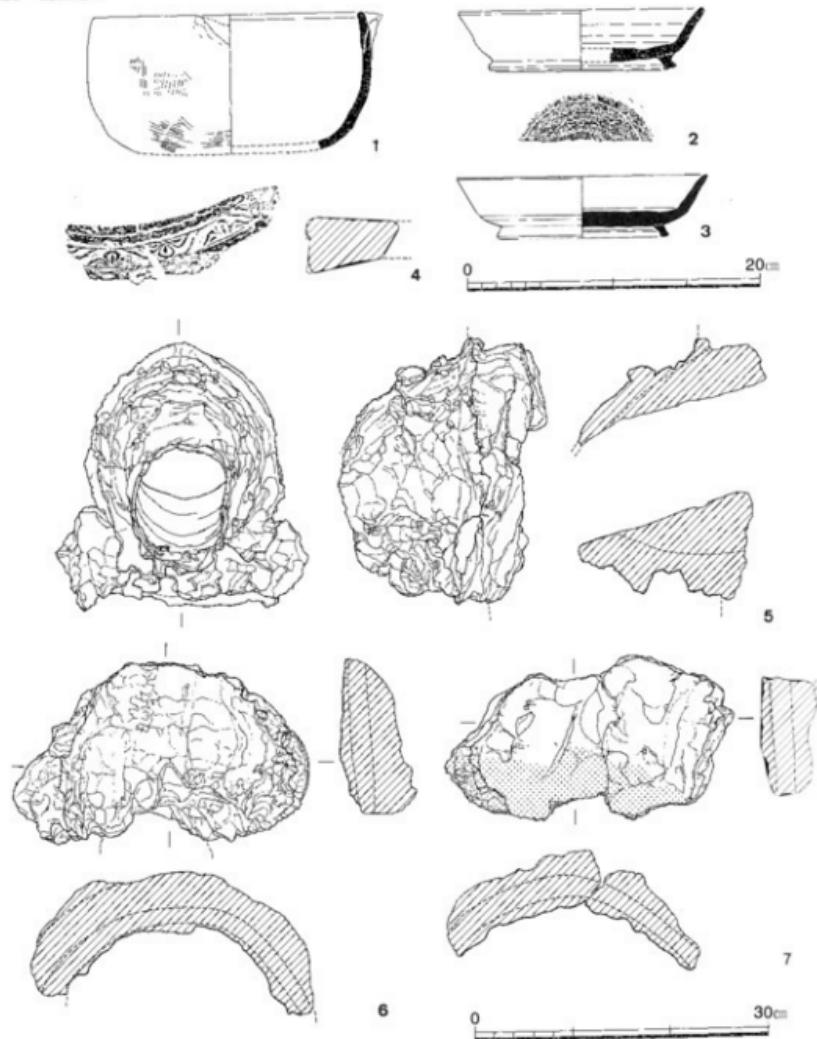
炉壁は遺構内の全ての層に包含されているが、その量は上層部分に最も多い。大型の破片も上層部に集中し、廃棄の順序を示す状況として考えられる。破片の接合関係はまだ検討不十分であるが、炉形は円筒状の堅形炉になるとされるものばかりである。炉壁の内面は表面が熔けてガラス質になっているものが圧倒的に多いが、中には発泡し、多孔質になったものや、須恵質に焼けてひび割れた部分もある。壁厚は破片によって異なるが、厚いものでは8cmほどのものがある。焼きは内面が多孔質、須恵質になっており、外側へ順に暗灰色、黒灰色、黄灰色ないし赤灰色と焼きが甘くなっている。胎土にはスサが多く含まれており、粘土紐を巻き上げて成形したことを示す破片も多い。いずれの破片も内面には鉄分がこびり付いており、この炉が鉄を熔解したことを見ている。

5は縄羽口である。炉の内面から内側に突き出た部分で、炉壁からの剥離面を残す。外面は全面熔けてガラス化しており、特に下部は流れたガラスが厚く垂れている。羽口の内面は赤灰色を呈する胎土素地のままである。羽口の内径は炉壁部分で100mm、先端部分で93mmと若干先が細くなっている。厚さは炉壁部分で35mm前後を測る。炉壁と羽口との角度は水平角から14度ないし15度の傾斜をもち、内壁から15cmほどの長さで残存されている。

図版7-3は他の羽口片である。内壁からの長さがわかるものでは9cmほどのものもある。内径は根本で94cmから110cmあり、いずれも大型品である。

6は炉壁で最も大きな破片の一つで、S X 44736-Aから出土した円周の1/2弱のものである。この破片で炉の内径は円形に復原して24cmほどになる。⁽⁹⁾ 内壁表面は全面ガラス化しており、鉄分も多く付着している。壁断面は内面の8mmから10mmがスポンジ状に多孔質化している。この外側は12mmから15mmほどが灰白色の堅い焼き、10mm前後が淡青灰色の須恵質になり、さらに15mmが黒灰色の軟質、5mm以上の淡赤灰色の軟質部分となっている。この破片の下部には羽

20 出土遺物



第16図 出土遺物実測図 (1/4・1/6)

口が挿入されて剝離した痕跡を残す。羽口の復原外径は13cmほどになる。

7は6の隣で出土したもので、内径は31.6cmに復原できる。内面下1/3ほどが多孔質のザラザラした表面であるのに対し、上面はガラス化した面になっている。この違いは操業時の炉内状況の相異を示すものであろう。壁断面は内面の10mm前後がスポンジ状に多孔質化している。この外側は20mmから25mmほど淡青灰色の須恵質になり、さらに20mmが黒灰色の軟質、15mm以上の淡赤灰色の軟質部分となっている。

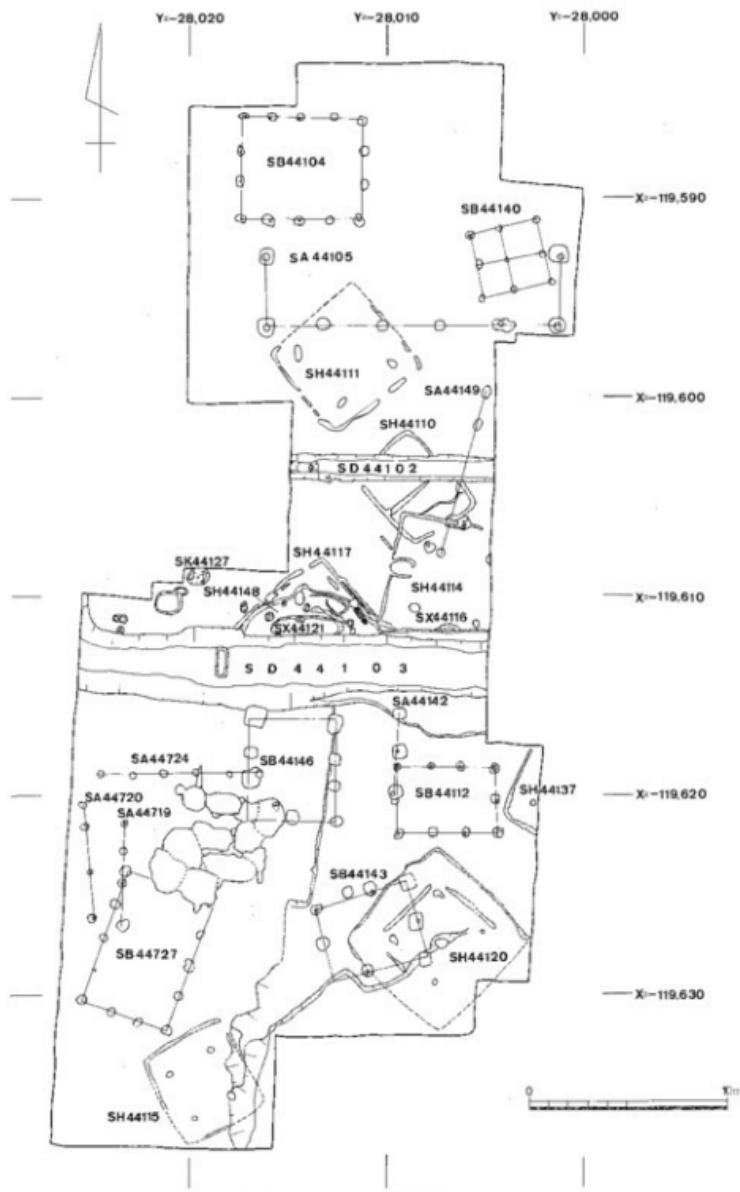
図版6-3左は内径45.6cmほどに復原できるもので、内面は全体がガラス化し、さらに表面に炭やガラス化した流動物が多くこびり付いているものである。SX44729-B 3層から出土した。断面は10mmから15mmの厚さで多孔質部分があり、その外側が15mmの須恵質部分、そして黒灰色の軟質部分となる。この様な断面の熱変化の状況が炉内の上下での温度差を表現しているものと考えると、この破片は7に近い部分であると考えられる。

図版6-3右はSX44729-Bで検出された唯一原位置を保っていた炉体である。取り上げ時に崩壊し、まだ接合が不十分であるが、内面はほとんどが多孔質のザラザラした表面で、部分的に須恵質でひび割れた表面になっている。この破片での内径は40cmほどになる。この破片の出土状況から、この様な内面の様相は炉底より10cmほど上部での現象であることがわかる。

土器類は前述したように二次堆積と考えられるものがほとんどである。特に炉跡群から出土したものでは、古墳時代の遺物として6世紀代の須恵器杯身片や應片、カキメを有する壺片などがある。

炉の時期を検討する材料としてはSX44729-Bから若干出土している。第16図1は土師器片口楕である。第2層、炉体に接して出土しており(図版5-2)、接合して2/3ほどになった。口縁端部は内面に若干肥厚し、体部外面は刷毛目調整されている。類例はないが、端部の特徴や調整から9世紀前後の時期に押さえられよう。ほかに土師器壺の破片も数点出土している。2の須恵器杯Bは奈良時代に属するもので、第3層から出土している。底部外面にはヘラ記号が認められる。また小片であるが、遺構の輪郭を少し下げたところで10世紀頃の灰釉陶器楕口縁部片が出土している。これらの遺物のうち奈良時代のものは二次堆積として考え、1と土師器壺の時期が炉破碎時、灰釉陶器は遺構が最終的に埋まった時期として考えたい。

他の遺構では、3が掘立柱建物SB44146・P167掘形上面から出土したもので、これも2と同様の時期のものである。これは1/3ほどの破片であるが、ほかの柱穴では1/2ほどの6世紀後半代の須恵器杯身も出土しており、二次堆積遺物として考えている。



第17図 今回調査の主な遺構配置図 (1/300)

5 まとめ

右京第447次調査の成果は以上であるが、これらの遺構を検討するために右京第441次調査も合わせて検討することが不可欠である。右京第441次調査の概要は第17図に示したように、弥生時代後期の竪穴住居1軒（SH44148）、古墳時代前期の竪穴住居6軒、古墳時代後期の竪穴住居1軒（SH44114）、奈良時代と考えられる掘立柱建物2棟（SB44140・SB44143）、長岡京期の掘立柱建物3棟（SB44104・SB44112・SB44146）、柵1列（SA44105）、近世の溝2条（SD44102・SD44103）などが検出されている。

近世の溝は東西方向に2条確認され、その内南の広い溝は敷地西端で直角に北折する。規模からは方形に巡る堀状の機能が考えられるが、溝の北から同時期の遺構は全く検出されていない。当地の北東40mには戦国期に存在した開田城があり、関係が注目される。^[10]

今回の調査によって検出された炉跡群は、その性格と時期について現地調査でかならずしも明確な根拠が押さえられたわけではない。時期決定できる遺物が少ないので、ここが生産現場である点を考慮すると当然の現象であるとも考えられる。まだ全ての遺物整理が済んでおらず、検討課題も山積みしている状態であるが、そのような中で潮見浩氏や土佐雅彦氏から鉄炉であるとのご指摘を賜り、また内田俊秀氏には、短い時間の中、科学分析によってそれを裏付けしていただき、さらに具体的な原材料の問題にまで踏み込んでいただくなど、今後の整理・研究に大きな視点を開いていただいた。記して感謝すると共に、ここでは現段階で指摘可能ないくつかの問題を取り上げるに留め、右京第441次調査の整理とともにさらに検討を加えることをしたい。

遺構の時期と性格について

時期については、今回の調査では明確に限定する資料は得られなかった。土師器片などから歴史時代以降であることは確実である。奈良時代の土器も出土してはいるが、天井部が屈曲するタイプの須恵器杯B蓋の小片も出土していることと、周辺右京第109次調査^[11]で出土した今回と同タイプの炉壁に確実に長岡京期の土器が伴出していることから、操業の開始は長岡京期と考える。操業の停止時期については、炉の数次に渡る作り替え、特に長岡京期の掘立柱建物に近接することと、切り合いで最も新しい炉が建物廃絶後に築かれている点を考慮すると長岡京期に限定する要素は少ない。しかもSB44146の柱掘形および炉跡群の周辺柱穴から炉壁片が出土する事実は、たとえ長岡京期であっても少し離れたSB44112やSB44104では見られないことから、炉跡群の初期の炉はSB44146以前にすでに存在したことを見出している。SX447-29-B上面で出土した灰釉陶器片はまぎれこみとしても、炭焼き窯SX44121からは同様の灰釉陶器片と軟質の綠釉陶器片が確実に出土している。これが遺構の完全埋没時期と考えられ、9世紀頃まで操業が継続していた可能性は否定できない。いずれにしても当地での鉄造が長岡



第18図 調査地周辺の条坊と地形 (1/2000)

京遷都に伴って開始されたことは、工房の性格を検討するうえで重要な要素になってくる。

今回出土した炉壁は、いずれも大型の羽口が付く竪形炉に復原されるものである。従って炉跡群として報告した12基の土坑がいずれも片隅に竪形炉を据え付ける炉の施設であると考えた。炉の据え方は土坑の底面に粘土を敷いて叩き締め、壁に接して炉を置き、おそらくは壁寄りの半面を粘土で固めていたものと考えられる。炉体が原位置を保っていたSX44729-Bの他にも壁が垂直になる部分をもっているものは多い。この形態は半地下式の竪形炉と同じような構造となるが、湯を取り出す時の空間が狭く、機能的に問題が残る。

炉本体の規模は内径が24cmから40cmほどの円筒形で、スサを混入した粘土紐を輪積みして成形し、炉の厚さは8cmである。炉壁内面は、下部ではスponジ状に発泡してざらざらであるのに対し、礪が挿入される部分とその上下は溶けてガラス質に覆われている。スラグ堆積層の中にこのガラス質の小片が多く含まれていることから炉が数回使用され、その都度内壁を掃除していたことが伺われる。

長岡京内で炉壁が一括して出土している例に本調査地の西隣りの町である右京六条三坊七町（右京第109次調査）と左京三条一坊一町（宮跡第128次調査）⁽¹²⁾が挙げられる。また左京二条二坊八町（左京第14次調査）⁽¹³⁾では鉢溝とともに雨蓋の鋳型が出土しており、木簡も出土している

ことからこの町内に官営工房が想定されている。この内右京第109次調査例からは、本調査地を含む工房が一町内に留まらず、小路を隔てて隣の町にまで及んでいたことが想定される。このことは、本工房が個人レベルの施設ではなく、大規模な官営の鋳造工房であったことを伺わせる。

長岡京条坊との関係

長岡京期の遺構配列を見ると、柵S A44105を境界として南に炭焼き窯と熔解炉群が配置されている。熔解炉が狭い範囲で次々作り替えられていることは、鉄を熔かす場所としての規定が存在したことを物語っている。当地は右京六条三坊二町の北西部にあたる。この町および西隣の七町の南1／3ほどは開析谷の落ち込みとなっていることから、工房内の諸施設は谷に沿った部分に配置されていたと考えられる。炉の西側に簡易な柵が数回作られていることからは、西三坊坊間東小路に対しての目隠しと理解されるが、このような柵からもさらに西に関連する作業場があったことを推測できよう。

掘立柱建物S B44146とS B44727の熔解炉群との関係は、いずれも炉に近すぎるという問題点はあるものの、この2棟の建物の間で炉の作り替えが行われていることと、炉との切り合い関係が埋土的に比較的見分けやすいことを考慮すると、2棟が同時には存在していないにしても炉に関連して存在したと考えざるをえない。炉が同時期に何基あったかという問題とともに今後に残る課題である。

都城における官衙組織の中で鋳造を司る部署は、大蔵省の典鋳司を筆頭にいくつかの官司が伺知れる。中でも宮跡第128次調査で出土した炉壁は春宮坊の主工署で使用されたものとして想定されている。⁽¹⁴⁾ 残念ながら今回の調査では鋳造の鋳型などは出土しておらず、何を鋳造していたかは全く不明と言わざるをえない。⁽¹⁵⁾ 長岡京内で出土する鉄遺物は、これまででは雨蓋、⁽¹⁶⁾ 車軸受け、⁽¹⁷⁾ 鋏先⁽¹⁸⁾が知られているが、釘や刀子などの鍛造品と比較してその数量は非常に少ない。今後、右京第441次調査の整理を通してさらに検討を加えていきたい。（小田桐 淳）

注1) 遺物実測にあたっては、上野恵己の協力を得た。

2) 右京第441次調査は1993年8月2日から10月3日まで実施した。

3) 日下雅義「長岡京市域地形分類図」「長岡京市史 資料編一付図」 1991年

4) 小田桐淳「右京第109次調査概報」「長岡京市センター年報」昭和57年度 1983年

5) 乙訓事務連絡協議会編「長岡京跡」 1994年

6) 岩崎誠「右京第90次調査概要」「長岡京市報告書」第9冊 1982年

7) 中島皆夫「第91132次立会調査概報」「長岡京市センター年報」平成3年度 1993年

報告は右京第379次調査とあわせて掲載しているため、位置図などでは「R379」となっている。

8) 類例は平安宮で数種知られているが、乙訓ではまだ発見されていない。周辺では泉殿

跡がまだ内容がはっきりしていないが存在している。この瓦が泉殿跡に伴うものであるかどうかは今後の調査に期待したい。今回の調査でも平安時代の土器は一緒に出土しているものの、遺構は明確なものがない。

- 9) 今回は正円形として計測したが、破片は橢円形になるようなものが多い。接合の状況によつても変わってくるため、炉形復原に際して再度検討したい。
- 10) 原秀樹「鎌倉・室町・桃山時代」『長岡京市史 資料編一』 1991年
- 11) 注4と同じ
- 12) 山中章「長岡宮跡第128次調査概報」『向日市報告書』第13集 1984年
- 13) 戸原和人「左京第14次調査」『長岡京ニュース』9・10号 1978年
- 14) 注12と同じ
- 15) 右京第441次調査では、近世溝ないし谷へと落ち込む部分の近世遺物包含層から鋳型と思われるような小片も出土している。鋳型や未製品などは南の谷斜面に投棄されている可能性が強いため、今後周辺での調査で出土することに期待したい。
- 16) 山中章「長岡宮跡第116次調査概報」『向日市報告書』第10集 1983年
- 17) 原秀樹「右京第400次調査概報」『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年
- 18) 木村泰彦「長岡京時代」『長岡京市史 資料編一』 1991年
岩崎誠「左京第269次調査略報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年

付論 S X 44729-B出土炉壁付着物の検討

京都芸術短期大学 内田俊秀

1 はじめに

1994年1月、財長岡京市埋蔵文化財センターの小田桐淳氏が当方の研究室を訪れ、長岡京跡右京第447次調査で出土した、S X 44729-B出土炉壁の付着物について調査するよう依頼を受けた。この炉壁は広島大学名誉教授潮見浩氏の調査から、鋳造炉の破片であると理解されていた。今回の調査はこの前提にたち、自然科学手法でも確認し、さらに鋳造技術の細部にわたっても明らかにするという目的ももっていた。しかし当方に与えられた時間的余裕が約20日と短期間であったため、分析結果を解釈するにあたり、出土した他の鋳造関連遺物、スラグ、轄羽口等比較研究を当然すべきところが、不可能であった。従って本報告は速報として、炉壁の付着物についての調査結果だけにとどめる。

2 観察と結果

図版7-4は炉壁の内側である。強い熱影響を受け、炉体表面が発泡しているのが観察される。所々に茶色い酸化鉄の付着物が見られた。遺物は調査期間中に既に水洗され、付着土等は除去されていたので、この酸化鉄に着目し、埋没期間中の沈着物か、あるいは鉄の熔解作業にともなう付着物かまず調査した。試料は、炉壁内面で丸く盛り上がった酸化鉄の付着物がある部分を切り出し、透明エポキシ樹脂に包埋、エメリー紙、アルミナパウダーで研磨、鏡面仕上げし、ナイタール（硝酸3%、エタノール溶液）で腐食したものを用いた。なお試料として切り出す部分の選択に当たっては、発掘担当者の許可の下、十分な注意を払い遺物が受ける被害を最小限に食い止めるべく行われた。図版7-5から図版8-3までは走査型顕微鏡（SEM）の組成像で、図版8-4から6まではX線マイクロアナライザー（EPMA）の写真である。使用分析機器は、SEMが日本電子JSM-5300LV、EPMAは日本電子JED-2001（エネルギー分散型X線分析装置）で、設定条件はw d 21mm、電圧、倍率などは写真に写し込んである。

図版7-5の右半分の白い球は、ガラス質のスラグ中に浮かぶ鋼の球である。この球のほぼ中央部を四角く囲みAとし、図版8-1に拡大した。またスラグと接する部分をBとし図版8-3に、この位置での鉄の分布を図版8-4、珪素を図版8-5、カルシウムを図版8-6に、白い点の集合で示した。また、Bを囲むやや広い部分を図版8-2とし、鋼部とスラグ部分およびその境界部分を示した。

3 考 察

図版8-4鉄の分布を見ると、全体に高濃度である。炭素について、今回使用した分析装置では測定できないため、その分量と分布は不明であるから、この点に関しては保留しなければならない。しかし写真の組成と鉄の分布からパーライト組織を持つ炭素鋼であることが推定できる。また、図版8-2で鋼とスラグの混在領域が、鋼を囲むように存在していることがわかる。これから、操業中の炉に装入された鋼の粒が、周囲を若干熔解しただけで、炉壁の表面の溶けたスラグにまきこまれ、そのまま反応は進まず冷却したと推定される。図版8-3の右下半分は図版8-4から成分は鉄がほとんどを占め、カルシウムや珪素はほとんど入ってないと理解できる。図版8-5と6は珪素とカルシウムの分布を示しており、両者はほぼ重なり合って存在し、またこの領域には鉄も存在している。

この炉の形は、円筒形で縦型炉のタイプであろう。作業の性格については、長岡京の中という場所、また鉄鉱石の鉱山が近くに見あたらないところから製煉炉である可能性は非常に少くなり、熔解途中の鋼が炉壁に付着していたことに注目すれば、熔解炉と推定される。しかしこれを断定するには、廃棄されたスラグの科学分析等のさらにいくつかの調査が必要であろう。砂鉄を用いる製錬炉の可能性については本稿では検討不可能である。熔解作業について考えてみると、生産される製品は、直接的にそれを示す物がまだ発見されていないので推定の域をでないが、スラグに木炭の噛み込みが多いことから、木炭を供給源とし、炭素を鋼に侵炭させ、溶融点を下げ比較的低い温度で、鉄の鉄物を作ることを目的としたことも考えられる。鉄鉄物である「雨壺」や、その鉄型と思われる土製品も長岡京で出土していることも加味すれば、状況証拠であるがこの仮定を支持する。

炉の操業状態を復元するにも、まだ多くの困難を伴う。炉壁の内側に突き出た羽口の内径は約93mmと大きい。送風装置は、例えば多賀城市の柏木遺跡等で発見されている、製錬炉の後ろに設置された踏み藉のようなものが使われたのであろうか。また熔解炉としてタイプの似た奈良時代の例では、東大寺の大仏鉄造に使用されたと推定される甑炉が、銅合金の熔解ではあるがあげられる。これらとの比較研究も、今後に残された課題であろう。

最後にこのような機会を設けてくださった、御長岡京市埋蔵文化財センターの小田桐淳氏に感謝いたします。

第3章 長岡京跡右京第448次（7 ANMS I - 13地区）調査概要

——長岡京跡右京七条二坊九町・開田遺跡——

1 はじめに

- 1 本報告は、1993年10月14日から11月15日まで、長岡京市開田四丁目405-4において実施した長岡京跡右京七条二坊九町（六条二坊十一町）、西一坊坊間小路、開田遺跡の発掘調査に関するものである。調査面積は117m²である。
- 2 本調査は、長岡京跡の西市および中世の開田遺跡に関する資料を得ることを目的に実施したものである。当地では1990年から毎年度ごとに調査を実施しており、本年で4年目である。
- 3 調査は、平成5年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり実施した。現地調査は財団法人長岡京市埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼し、原秀樹が担当した。
- 4 調査実施にあたっては、土地所有者である藤井博一氏をはじめ、水道の借用をお願いした前川石一氏など周辺の土地所有者、近隣住民の方々のご協力を得た。
- 5 調査後の図面整理は、原・池庄司淳・橋田邦夫が主に担当した。なお、本年度の調査については遺構の報告にとどめ、遺物とこれまでの調査成果については一連の調査が終了する来年度にまとめて報告する。
- 6 本報告の執筆および編集は、原が行った。



第19図 発掘調査地位置図 (1/5000)

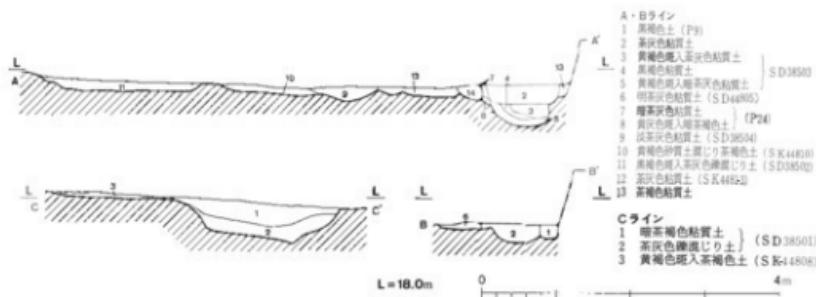
2 調査経過

本調査地は、阪急長岡天神駅の南東約500mに位置している。犬川右岸の氾濫原に立地しており、一帯は南東方向へ緩やかに傾斜している。標高は18~19mである。当地は、周辺に住宅が軒を連ねる一画に残った数少ない畑であり、今回の国庫補助事業による発掘調査は1990年から開始して本年で4年目となる。これまでに、1990年に右京第364次¹³⁾調査、1991年に同第385次¹⁴⁾調査、1992年に同第413次¹⁵⁾調査を実施しており、弥生時代中期の土器・石器、古墳時代中期から後期の竪穴住居・掘立柱建物・溝、奈良時代の土坑、長岡京期の掘立柱建物や井戸・西二坊坊間小路西側溝、鎌倉・南北朝時代の掘立柱建物・土坑・溝、戦国時代の掘立柱建物・礎石建物・櫓状建物・土坑・井戸・堀などを確認している。この他にも、周辺では鶴長岡市埋蔵文化財センターによる発掘調査が行われており、旧小字澤井、清水ヶ口といった地名のとおり、中世の井戸が集中して検出されている。なお、当地における一連の発掘調査の全体的なまとめについては、1994年に実施する最後の調査とあわせて報告する予定である。

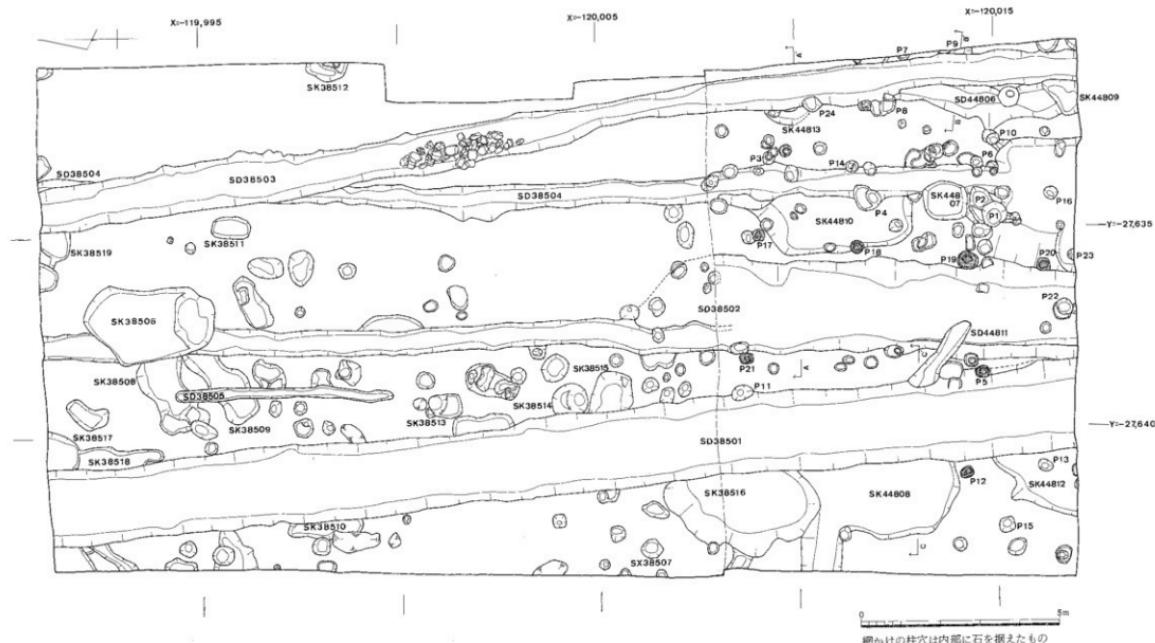
今回の調査地は、1991年の右京第385次調査で検出した遺構の広がりを確認するために、先の調査地と連続するトレンチを設定した。調査はこれまでと同じく小型重機で表土等の除去を行い、調査終了後は再び元の畑地に埋め戻しを行った。



第20図 南壁土層図 (1/100)



第21図 A・B・Cライン土層図 (1/80)



第22図 検出遺構図 (1/100)

3 検出遺構

今回の調査では、弥生時代中期の溝、長岡京の条坊側溝・土坑、中世の溝・土坑・柱穴などを検出した。このうち、既に調査が行われた北側の右京第385次調査地から延びる溝4条と土坑1基については同一遺構であることから同じ遺構番号を使用した。遺構は溝S D38501の西側では石礫を含む黄褐色系の地山面から検出したが、これより東側では地山上に堆積した茶灰色系の粘質土層から検出した。また、先の調査で検出した不定形な掘り込みについては、遺構でない可能性が高いことから今回は平面図から省いた（第22図）。両地点の境目は一点破線で示している。

(1) 中世の遺構

右京第385次調査で検出された溝、土坑の他、石を据えた柱穴などがある。各遺構はおおむね14世紀前半を中心とする鎌倉・南北朝期と、16世紀前半を中心とする戦国期に分けられる。今回の調査においても、これまでの成果と大きく変わるものはない。

溝S D38501 幅2m余り、深さ0.4~0.6m。先の調査では溝の掘り直しが指摘されたが、溝は南へ下がるほど当初の規模に近くなっている。今回の調査では確認できなかった。溝の中程から底部にはこぶし大までの石が隙間なく詰まっている。割れて尖ったものも見られる。この状態は溝の真ん中付近まで続いている。先の調査では、溝上層に比較的大きな石が多く、底部に小さな石が多い状況が観察されている。石に混じって多くの土器が出土した。

溝S D38503 幅0.8m、深さ0.3~0.5m。先の調査では人頭大の角礫とともに大量の遺物が出土した。今回は集石部分は見られなかったが、溝の北側から多くの遺物が出土した。

溝S D38504 幅約0.6m、深さ0.2m。南側では溝幅が3m余に広がっている。

土坑S K 38516（第23図） 長辺4m、短辺2m以上、深さ約0.3mの長円形。全面にこぶし大程度の石が隙間なく詰まっている。

溝S D44806 溝S D38503に切られる。幅約0.8m、深さ0.1m。

土坑S K 44807 溝S D38504に切られる。長辺1.1m、短辺0.9mの隅円方形。深さ0.3m。ミニチュアを含む土師器皿と、瓦器碗・羽釜などが出土した。

土坑S K 44809 溝S D44806に切られる。土師器の小片が出土した。

土坑S K 44810 東半部分を溝S D38504に切られる。深さ0.1mの長方形。

その他の柱穴 掘形内に石を据えたものと素掘りのものがある。直径0.3~0.5m。P 17~P 20は石を据えた柱穴である。



第23図 土坑S K 38516（北から）

34 検出遺構

(2) 長岡京期の遺構

右京第385次調査で検出された溝 S D 38502の南側延長部分の他に、土坑 S K44808を検出している。遺物はこれまでの調査と同じく少量かつ小片である。

溝 S D 38502 前々回の右京第385次調査で西二坊坊間小路西側溝に相当することが明らかにされた。今回はさらに南へ10mほど検出したが、両調査地間の溝幅にはかなりの開きが認められた。溝の規模は北側で幅0.7m、深さ0.1m、南側で幅約2.2m、深さ0.3mであり、溝の形状は西肩が直線的につながるのに対して、東肩はX = -120,005付近から広くなっている。このように、条坊側溝の幅が途中から変わる事例は最近では右京第400次調査⁽⁴⁾の七条条間北小路にも見られるが、本地点の場合は検出状況の差異によるところが大きい。先の調査では、溝は地山面で検出したのに対して、今回は整地層上面で検出しており、この間には約0.3mの高低差が存在する。この整地層は第385次調査地の南東部に部分的に堆積しており、これを除去した地山面で検出された溝は当初より削られて狭められたものとなる。

土坑 S K44808 西から延びる溝と重複すると考えられるが、相互の切り合いが不明瞭なため一つの遺構とした。深さ0.1m。わずかに須恵器杯B蓋と丸瓦などが出土した。

(3) 弥生時代の遺構

溝 S D 44811 北西から南東方向に延びる溝。全長約2m分を検出した。深さ0.2m。中期の壺や甌、高杯などの小片が出土した。

4 ま　と　め

今回の調査は、右京第385次調査で検出した遺構の広がりを確認するために実施したものである。中世については、南北溝3条と土坑1基の延長部分を検出した他、掘形内に石を据えた柱穴等を検出した。長岡京では、西二坊坊間小路西側溝が途中から溝幅を拡張することが判明した。また、周辺ではこれまでにも弥生時代の土器や石器が出土していたが、今回ようやく溝の一部を確認することができた。この他、長岡京と中世の遺構から飛鳥・奈良時代の須恵器や平安時代の綠釉陶器が少量出土したが、遺物の大半はこれまでと同じく中世の土器や陶器で占められている。中でも溝の遺物については、両調査地の北半部と南半部に集中して廃棄された状況が認められた。これまでの調査成果については、遺物とともに最終年度に報告する予定である。

注1) 中島皆夫「右京第364次調査概要」『長岡京市報告書』第27冊 1991年

2) 木村泰彦「右京第385次調査概要」『長岡京市報告書』第29冊 1992年

3) 原秀樹「右京第413次調査概要」『長岡京市報告書』第31冊 1993年

4) 原秀樹「右京第400次調査概報」『長岡京市センターニュース』平成4年度 1994年

第4章 海印寺跡第2次（7CKPME-2地区）調査概要

1 はじめに

- 1 本報告は、1993年4月5日～4月28日まで、長岡京市奥海印寺明神前22で実施した海印寺跡第2次発掘調査に関するものである。調査面積は約184m²である。
- 2 本調査は、海印寺跡の範囲確認調査の一環として、長岡京市教育委員会が主体となり、国庫補助事業として実施した。現地調査は長岡京市教育委員会文化財係 中尾秀正が担当した。
- 3 調査後の遺構図面の整理、遺物の分類・実測・製図は、中尾・池庄司 淳・小畠絢子・田中智紀が主に担当した。
- 4 調査実施にあたり、土地所有者である樋口喜久夫氏をはじめ、近隣土地所有者の方々のご協力を得た。また、調査中には財団法人長岡京市埋蔵文化財センター山本輝雄・原秀樹・島田吉男などから指導、援助を賜った。
- 5 本報告の編集・執筆は中尾秀正が行った。



第24図 発掘調査地位置図 (1/5000)

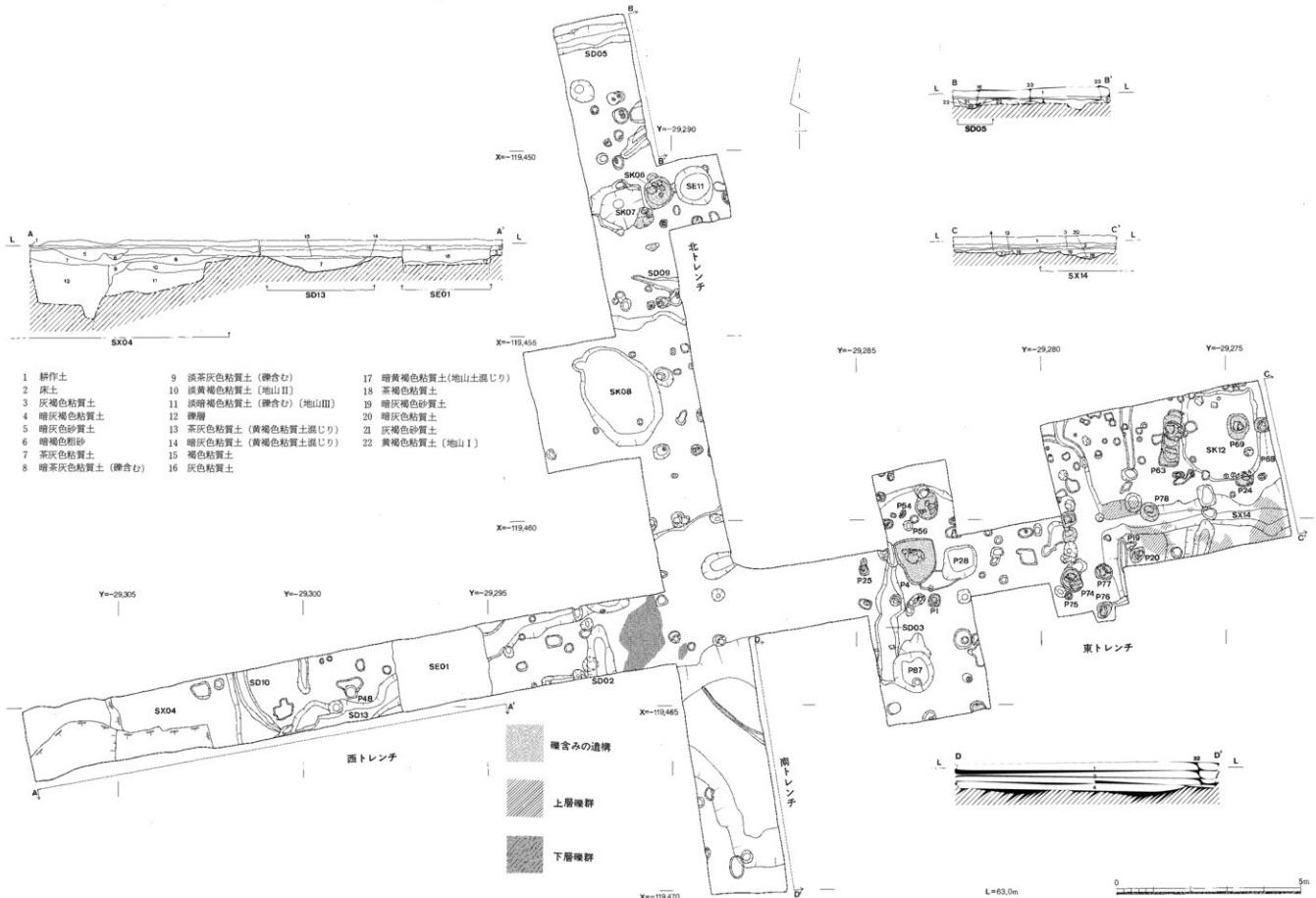
2 調査経過

当調査地は長岡京市の北西部にあり、西山から南東方向に派生する標高約63mの段丘部に位置している。当地の北側には寂照院があり、背後の山腹には式内社の走田神社がある。寂照院は平安時代の古刹である海印寺の子院の一つである。山門には康永3年（1344）に造立された仁王像がある。山門を入ると正面に本堂があり、堂内には本尊千手観音坐像の他に建保5年（1217）の年号をもつ增長天などの四天王像等が安置されており、かつて隆盛を誇った当寺の面影を残している。

ところで、海印寺は海印寺跡（写）によると嵯峨天皇の御願所として僧道雄が9世紀中頃に創建した寺院で、当時は10院があり、朝廷が直接管理する定額寺となっていたという。その



第25図 調査地周辺図 (1/2000)



第26図 検出構造図 (1/100)

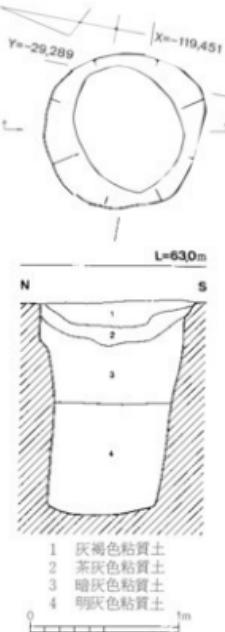
法灯を今日に伝える唯一の子院が寂照院であるが、残りの子院名や所在など海印寺跡の範囲や構造はほとんど明らかにされていない。ただ、これまでのところ東大寺などに残る文献史料が収集されているほか、当地周辺に残る「大見坊」「奥ノ院」などの字名から寺域の推定がなされたり、地元寺院に残る平安時代の仏像と海印寺の関係が議論されている程度である。一方、考古学の立場からは平成3年（1991）8月に本調査地のすぐ西側で初めて発掘調査が行われている。この調査では残念ながら寺院に関連する明確な遺構は検出されなかったが、縄文時代後期、古墳時代後期、戦国期から江戸時代にかけての遺構や遺物が確認され、寂照院が創建される以前から当地周辺に集落が存在することが明らかにされた。

さて、海印寺跡第2次調査として行った今回の調査は、個人住宅建設が計画されたため、それに先立って実施したものである。当地は寂照院の門前に広がる1町ばかりの平坦な水田地帯の一角にあり、眼下に奥海印寺地区や下海印寺地区的集落や田園風景が広がる。さらに遙く桂川や八幡市、京都と奈良、大阪を画す京阪奈丘陵を望むことができる。このような立地から当地付近に海印寺跡の重要施設が所在する可能性が高いと推定されるため、造成工事に先立ち遺跡の所在を確認し保存に必要な資料を作成する試掘調査を行った。調査は敷地内に幅1mで南北24m、東西35mの十字形の調査区域を設定した。南北方向の調査区域から重機によって耕土・床土の表土を除去し、灰褐色粘質土以下を人力によって遺構検出を始めた。ところが、灰褐色粘質土の下にある地山面黄褐色粘質土に掘りこまれた土坑や溝、柱穴を検出した。そのため、急きょ調査区の幅を2mに広げ、調査を実施した。その結果、南北及び東西トレンチ全域で灰褐色粘質土層に遺物を包含し、地山面も南に向かって下降していることが判明した。さらに地山面が下降する南東部においては灰褐色粘質土層の下に遺物を包含する暗灰色粘質土が堆積し、その下で黄褐色粘質土の地山面となっていた。そのため、遺構検出はまず灰褐色粘質土層を除去した面で行い、その後南東部では暗灰色粘質土を除去した面で行った。途中、遺構検出にともなって調査区域を一部拡張し、最終的な調査面積は184m²であった。調査終了後、再び重機と人力によって埋め戻しを行った。なお、調査区域は検出遺構図のように西・東・南・北トレンチと呼び、西トレンチの南西に設けた約2m四方の小グリッドを西グリッドと名付けた。

3 検出遺構

調査地の基本層序は、耕作土と床土の下に灰褐色粘質土（茶褐色粒を含む、以下第3層という）が堆積し、地表下約0.4mで黄褐色粘質土の地山面となっている。ただ、南東部（東・南トレンチ）においては、第3層の下に暗灰色粘質土（黄斑混じり、以下第4層という）が堆積し、地表下約0.6mで黄褐色粘質土の地山面となっている。第3・4層からは土師器・須恵器・瓦器・綠釉陶器・青磁・瓦等がいずれも出土しており、中世に堆積したもので大きな時期

差はないと考えられる。



第27図 井戸 S E 11実測図

検出した遺構の大半は中世のもので、ほかに近代と考えられる井戸1基などを検出した。

(1) 中世の遺構

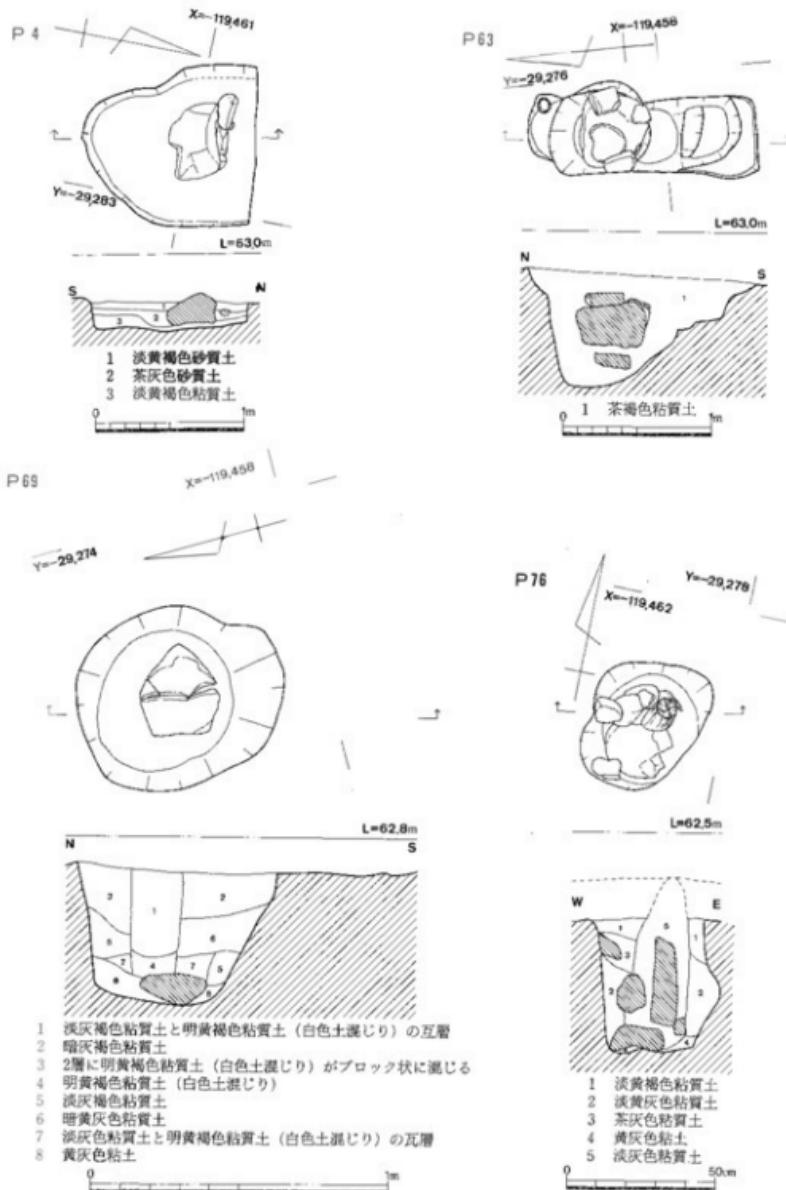
検出した遺構は、溝7条と土坑4基、井戸1基、落ち込み状の遺構2基のほかに多数の柱穴などである。これらの遺構は第4層上面および黄褐色粘質土の地山面で検出された。

溝S D 02 西トレントの東部。第3層を除去した面で検出した南北方向の溝。検出長は1.3mで調査区の南にさらにのびる。幅約0.8m、深さ約0.2mで、レンズ状の断面を呈する。埋土は2層で、黄褐色粘質土（地山土混じり）の下に灰色粘質土が薄く堆積する。遺物は土師器の皿・鍋・釜と終末期の瓦器碗などが出土地。

溝S D 03 東トレントの中央部。第3層を除去し第4層上面で検出した南北方向の溝。トレントの北壁から南に約3.6mで途切れる浅いもので、幅約0.6m、深さは約0.05mである。埋土は灰褐色砂質土である。埋土から土師器の皿・甕と瓦器の碗など14世紀の遺物に混じって平安時代の土馬の首部片が出土した。

落ち込みS X 04（図版13-2） 西トレント西端。第3層を除去した面で検出した流路状の落ち込みで、東肩を確認した。調査区域が限られたため規模は明らかにできなかったが、肩部で緩やかに下降し約3mの付近から急激に落ち込む素掘りのもので、幅5.4m以上、深さ1.9m以上である。調査終了時点での範囲確認や宅地造成時の擁壁工事での立会調査などから、この遺構は南北方向の流路で幅が10m弱あるものと推定される。埋土は茶灰色粘質土（第1層）・暗茶灰色粘質土（拳大から人頭大の礫を含む、第2層）・淡茶灰色粘質土（拳大の礫含む、第3層）・礫（第4層）の4層に分けられる。とくに第4層は出土遺物が上層に比べ極端に少なく、大半が礫（砂岩やチャートが多い）で人頭大の礫の間に拳大のものが詰まっていた。恐らくこの遺構は人為的に一時に埋められたものと考えられる。出土遺物はコンテナ3箱あり、大半が第1層からである。第1層からは土師器と須恵器、瓦器、黒色土器、白磁、青磁、製塩土器、瓦などが出土したが、中でも瓦器碗が最も多く、次に土師器の皿である。瓦器碗や土師器皿は13世紀代の特徴をもつものである。第4層からは瓦と土師器、須恵器、瓦器碗がわずかに出土した。

溝S D 05 北トレントの北端。床土を除去し地山面で検出した東西方向の溝。幅約0.7m、深さ約0.3mでレンズ状の断面を呈し、検出長は2mである。埋土は2層で、灰褐色砂質土



第28図 柱穴実測図 (1/20・1/40)

4.2 検出遺構

(上層)と灰色粘質土(下層)である。遺物は土師器と瓦器、黒色土器(A類)、瓦があるが、土師器の皿は15世紀末から16世紀前葉の特徴をもつものである。

土坑SK06 北トレンチの北部。第3層を除去し地山面で検出した円形の土坑。直径0.8mで深さ0.9mである。埋土は2層で、黄褐色粘質土(明灰色土混じり、上層)と黄色粘質土(灰褐色粘質土混じり、下層)に分けられる。底部には人頭大の石3個と拳大の石1個があった。遺物は土師器と須恵器、瓦器、瓦、炭片があり、土師器の皿は16世紀の特徴をもつものである。

土坑SK07 北トレンチの北部。第3層を除去し地山面で検出した土坑でSK06の西側にある。直径1.3mのやや不整形なもので深さ0.3mの播鉢状を呈する。埋土は3層で、灰褐色粘質土(上層)と暗灰色砂質土(中層)、灰色粘質土(下層)に分けられる。遺物は土師器と須恵器、瓦器、瓦、炭片に混じって土馬の脚部片がある。土師器皿は16世紀の特徴をもつものがある。

土坑SK08 北トレンチの中央部。第3層を除去し地山面で検出した梢円形の土坑。長軸3.0m、短軸2.0m、深さ0.2mである。埋土は2層で、灰褐色粘質土(上層)と暗黄褐色粘質土(灰褐色粘質土混じり、下層)に分けられる。遺物は土師器と須恵器、瓦器、青磁、瓦がある。

溝SD09 北トレンチの中央部。第3層を除去し地山面で検出した東西方向の浅い窪み状の溝。幅約0.5m、深さ約0.1mで、トレンチの東壁から西に約1.5mで途切れる。埋土は灰褐色粘質土で、土師器の皿が出土したのみである。

井戸SE11 (第27図、図版14-1) 北トレンチの北部。第3層を除去し地山面で検出した円形の井戸。直径1.0m、深さは1.4mで素掘りのものと考えられる。ただ、底部から長さ0.25mの板が交差させたような状況で出土しており、当初はなんらかの枠を施していたとも考えられる。埋土は4層で、灰褐色粘質土(第1層)と茶灰色粘質土(第2層)、暗灰色粘質土(第3層)と明灰色粘質土(第4層)に分けられる。底には薄く砂層があったが、湧水は認められなかった。出土遺物はコンテナ5箱あり、主に第2~4層からの出土で、土師器と須恵器、瓦器、木製品、種子、炭片などがある。なかでも土師器皿が多く、ほぼ完形である。小皿は内面に油煙の痕跡をもつ灯明皿が多い。また、木製品には箸や木栓等の生活用具以外に舟形、刀形の形代があり、種子類にはクルミ・ウメ・モモ・カボチャなどがあった。この井戸は土師器の皿などの特徴から15世紀末から16世紀前葉のものと考えられる。

土坑SK12 東トレンチの東部。第4層を除去し地山面で検出した隅円方形の土坑。東西2.2m、南北2.5mで深さ0.1mである。埋土は2層で、黄褐色粘質土(上層)と淡黄褐色粘質土(下層)に分けられる。遺物は土師器皿と瓦器碗が多く、須恵器、瓦、砥石等が僅かに出土している。瓦器碗は終末期の特徴をもつものである。

溝状の落ち込みSX14 東トレンチの東部。第3層を除去し地山面で検出した東西方向の溝状の落ち込み。当初の検出過程でトレンチの東端から西に約5mの範囲で疊が大量に入っていた。それを除去すると、幅0.7m、深さ0.1mの溝状の遺構が検出され、一段深くなっているこ

とが明らかになった。この遺構は上面で検出した礫群の範囲から幅1.7m以上、深さ0.3mと推定される。埋土は3層で、暗灰褐色砂質土（上層）、茶褐色粘質土（中層）、暗灰色粘質土（下層）に分けられる。遺物は礫を多く含む上層から土師器、瓦器のほかに須恵器、縁軸陶器、瓦等が僅かに出土しているが、土師器皿や瓦器椀は14世紀前半の特徴をもつものである。

柱穴群（第28図、図版14-2～8） 調査区の全域から多数の柱穴が検出された。とくに東トレンチに密集しており、調査敷地の東部に多く建物群があったものと考えられるが、これらの柱穴は検出した層位や埋土によって分けることができる。第4層の堆積が認められない北・西トレンチでは大半の柱穴が地山面で検出され、埋土は明灰色土と灰褐色粘質土の2種類があり、重複関係から前者が新しいと判断される。一方、東トレンチでは第3層を除去し第4層上面で検出されたものと第4層を除去し地山面で検出されたものに分けられる。前者は東トレンチ全域にわたって分布しているが、後者は東半部に多く見られる傾向がある。さらに前者は灰褐色砂質土と灰褐色粘質土（黄褐色粘質土混じり）を埋土とする2種類に分けられ、重複関係から灰褐色砂質土を埋土とするものが新しいと判断される。後者はおおむね茶褐色粘質土を埋土としている。しかしながら、これらの柱穴は調査区域が狭いため、残念ながら建物として把握するには至らなかった。

ところで、これらには柱穴内に人頭大からそれ以上の石が入るものがあり、その多くは根石として利用される。根石をもつ柱穴は14基があり、東トレンチに集中している。これらは第4層上面で検出したもの8基（P1・4・25・54・68・69・75・76）と第4層を除去し黄褐色粘質土の地山面で検出したもの6基（P20・24・63・74・77・78）がある。石材は主に砂岩と粘板岩であるが、第28図に示すP4のように比較的浅い柱穴に石を据えたものとP63・69・76のように深い柱穴内に据えた2種類がみられる。

（2）他の遺構

井戸S E 01 西トレンチの中央部。耕作土を除去した床土上面で検出した方形の遺構で井戸と考えられる。東西2.4m、南北2.0m以上で、さらに南北に広がる。ほぼ垂下する掘形で深さ0.4m以上である。埋土は褐色土（上層）、灰褐色粘質土（中層）、暗黄褐色粘質土（地山土混じり、下層）でさらに深くなる。中層からは多くの煉瓦片に混じって平瓦小片と瓦器椀が僅かに出土した。煉瓦はコンテナ1箱出土し、大半が破片であるが、形や大きさにより5種類（角状1・板状4）に分けられる。なお、この遺構は遺構検出面や煉瓦の出土等から近代のものと考えられ、調査期間の制約もあって一部の掘り下げに止めた。

溝S D 10 西トレンチの中央部。第3層を除去し地山面で検出した溝。幅0.35m、深さ0.1m弱の浅いもので、北西から南東に緩やかに湾曲し、SD13に合流する。埋土は茶褐色土（黄褐色粘質土混じり）で、土師器の小片が数点出土した。

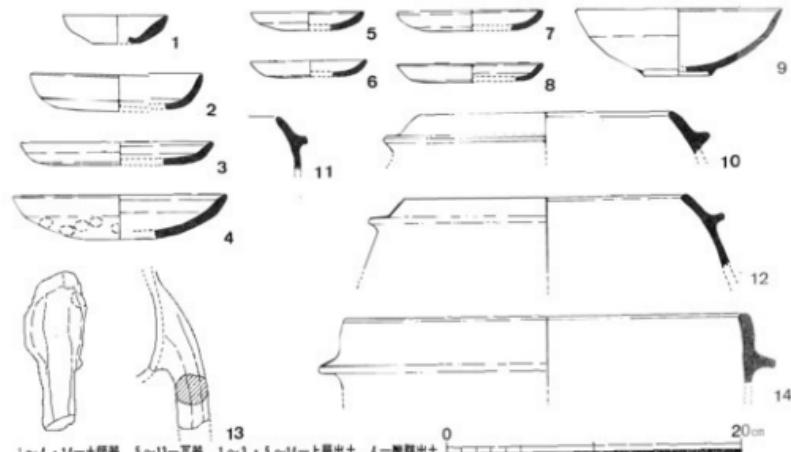
溝S D 13 西トレンチの中央部から東部において、第3層を除去した地山面で検出した溝。

44 出土遺物

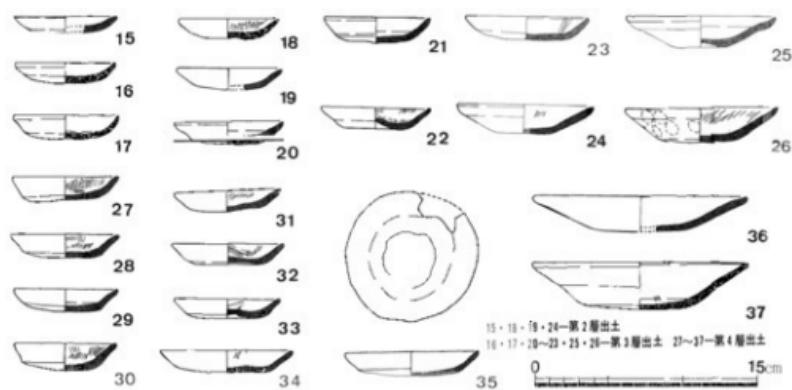
幅0.7m、深さ0.4mで北東から南西に流れる。検出長は約9mである。埋土は3層で茶褐色土(黄褐色粘質土混じり)、茶灰色粘質土、黄灰色粘質土(黄褐色粘質土混じり)に分けられ、僅かに土師器の小片が出土した。なお、中世の柱穴との重複関係から中世より古いと思われる。

4 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は整理箱で15箱程度であり、その大半が土器類で占められている。それ以外では石斧・石鎌・砥石などの石製品、箸や形代(舟形ほか)などの木製品、瓦製品、



第29図 落ち込みS X04出土土器実測図 (1/4)



第30図 井戸S E11出土土師器実測図 (1/4)

土馬や煉瓦などの土製品、クルミの種子などの自然遺物が出土している。

遺構別では井戸S E 11が5箱と最も多く、次いで落ち込みS X 04が3箱で、柱穴群から2箱、遺物包含層から4箱となっている。

(1) 土器類

土器類は弥生時代から近代に至るもので、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などに分けられる。その大半は13世紀から16世紀前葉にかけての土器類で、とくに土師器・瓦器で占められている。ここでは図化できた主な資料について遺構別に述べていく。

落ち込みS X 04出土遺物 (第29図、図版15) 大半の遺物が第1層から出土している。土師器・瓦器のほかに、須恵器(杯・壺・甕・鉢)、黒色土器・陶磁器・製塩土器などがある。なかでも出土の多い瓦器椀と土師器皿は大半が13世紀代のものである。

土師器には皿・羽釜・甕・盤等がある。皿(1)はいわゆるへそ皿で底部に押し上げた痕跡がある。皿(2・3・4)は口径が10cmを越えるが、口縁部が緩やかに内湾するもの(2)と口縁部が強いナデにより外反気味のもの(3)、上段のナデの部分が弱く外反し器壁が厚いもの(4)がある。4は第4層から出土したが、底部が丸みをもち内湾しながら体部・口縁部へとづく。黄灰色でチャート・石英・長石を多く含み粗い胎土で特徴的なものである。羽釜(14)はほぼ直立する口縁部に鋸部を貼りつけたもので、内面と鋸部までヨコナデを行う。

瓦器には椀が多く、ほかに皿・羽釜・盤がある。皿は口径により7.7cm前後のもの(5・6)と10cm前後のもの(7・8)に分けられる。いずれも内面のヘラミガキは認められない。椀(9)は口縁端部内面に沈線があり、断面三角形の高台をもつ。外面にはヘラミガキは認められることから橋本編年III期に比定できる。羽釜は内傾する口縁部に鋸部を貼りつけたもの(10~12)で、11は良好な焼成で暗銀色を呈する。13は三足羽釜の脚部片で、これ以外にも脚部片が出土している。

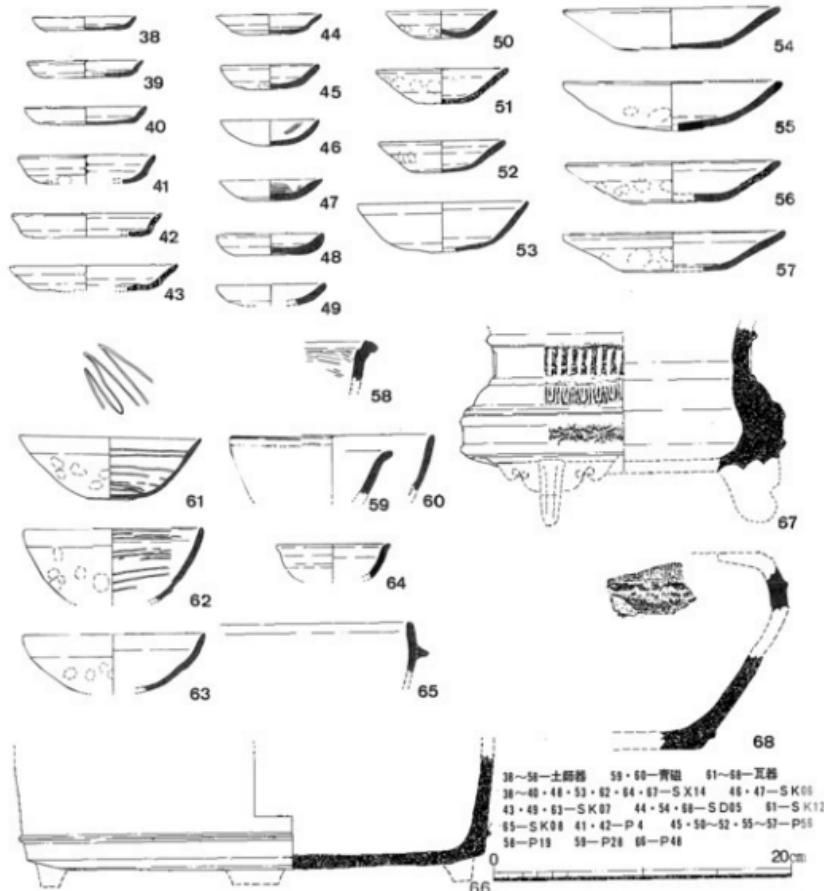
これらの遺物のうち、1は15世紀末~16世紀前葉、4は11世紀代、それ以外はおおむね13世紀の特徴をもつものである。

井戸S E 11出土遺物 (第30図、図版15) 主に埋土第2~4層から出土しているが、土師器・瓦器のほかに、須恵器(皿または椀)がある。

最も出土の多い土師器皿は口縁部の形態により次の2種類に分けられる。口縁部と底部の境目にはつよいナデによる稜が見られ、口縁部が外反気味のもの(15~23・27~35)と、口縁部が直線的に立ち上がりナデの部分が弱く外反して口縁端部を丸くおさめるもの(24~26・36・37)である。それぞれの口径や器高をみると、前者では口径6.9~8.4cm・器高1.4~1.8cmのもの(15~23・27~33)、口径9.0cm・器高1.5cm前後のもの(34・35)の大小に分かれる。そのうち、内面にハケ目があるもの(18・22・23・28・30~34)、見込みに丸いヘラミガキがあるもの(35)がある。後者では口径9.2~10.4cm・器高1.9~2.4cmのもの(24~26)と口径14.6~15.0

cm・器高2.3~3.1cmのもの(36・37)の大小に分けられる。そのうち内面にハケ目をもつものがある(24・26・37)。これらはいずれも15世紀末から16世紀前葉のもので、一括遺物といえよう。なお、これらの中には灯明皿として利用された痕跡をもつもの(20・21・27~29・31)がある。

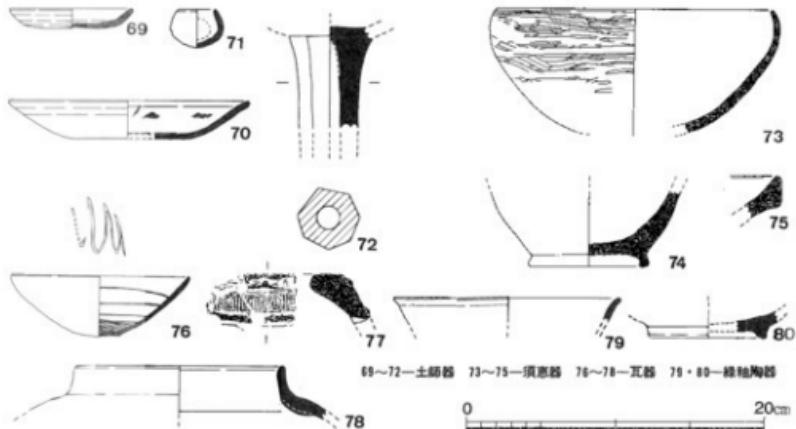
その他の遺構出土遺物(第31図、図版16-1) 上記以外の溝や土坑、柱穴から出土した土器で実測したものである。土師器には皿(38~52・54~57)・椀(53)・鍋(58)がある。土師器皿は口縁部の形態により次の3種類に分けられる。口縁部が緩やかに内湾するもの(45~49)と、平底で口縁部と底部の境目につよいナデによる稜が見られ口縁部が外反気味のもの(38~44)、平底で口縁部と底部の境目が直線的であるもの(50~57)。



第31図 その他の遺構出土土器実測図 (1/4)

8~44)、口縁部が直線的に立ち上がりナデの部分が弱く外反して口縁端部を丸くおさめるもの(50~52・54~57)である。それぞれの口径や器高をみると、口縁部が緩やかに内湾するものは口径6.4~7.8cm・器高1.4~1.7cmで、内面にハケ目を残すものがある(46・47)。ナデがきつく外反気味のものは口径7.0~8.2cm・器高0.9~1.3cm(38~40・44)と口径9.0~10.2cm・器高1.6~1.9cm(41~43)の大小に分けられる。さらに直線的に立ち上がるものはへそ皿(50)を除くと口径8.4~8.6cm・器高2.1~2.3cmのもの(51・52)と口径14.4~15.0cm・器高2.6~3.25cmのもの(54~57)の大小に分けられる。55は底部がやや丸みをもち内湾しながら口縁部へとつづくが、調整や胎土は51・52・54~57と同様である。椀(53)はいわゆる白色椀である。これらのうち、口縁部のナデがきつく外反気味の皿(38~44)・椀(53)は14世紀前半で、そのほかのもの(45~49・50~52・54~57)は15世紀末から16世紀前葉のものと考えられる。

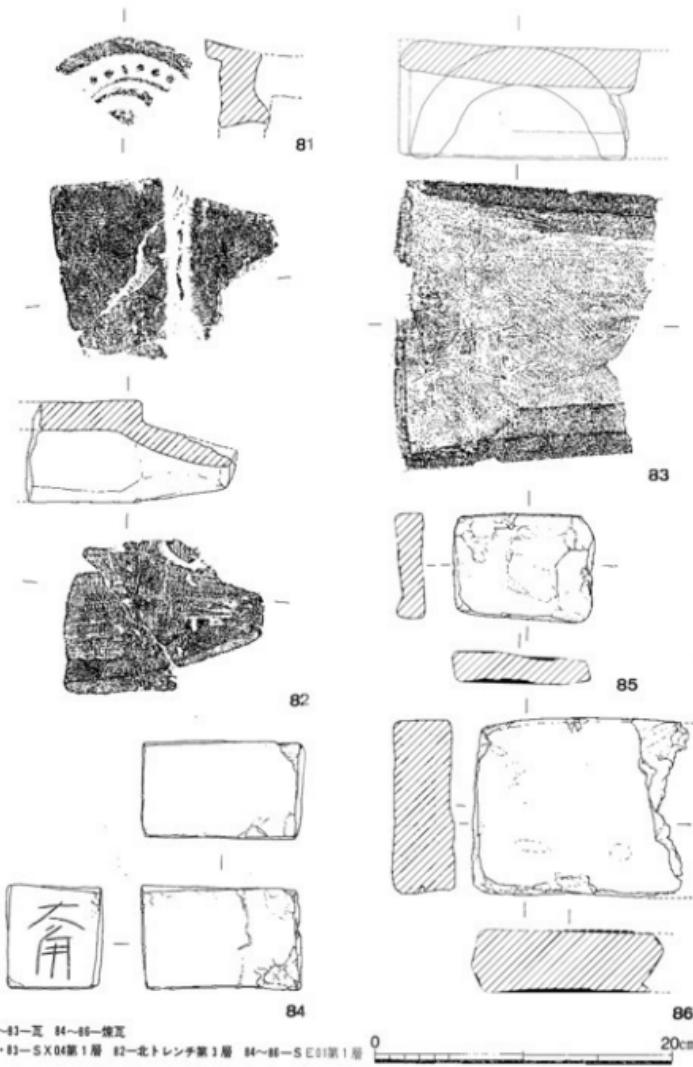
瓦器には椀(61~63)・小椀(64)・羽釜(65)・深鉢(66)・風炉(67)・浅鉢(68)がある。椀(61~63)はいずれも橋本編年IV期のものであり、底部に粘土をすりつけただけ(61)で、内面ヘラミガキも粗い(61・62)。風炉(67)は胴部と底部に続く円筒状部分が組み合わされた形態のもので、脚部と体部を欠損する。外面は淡灰茶色で装飾が施され、内面は黒灰色で炭素が吸着している。菅原氏分類の風炉B型である。鉢には深いもの(66)と浅いもの(68)があり、火鉢として使用されたと考えられる。66は斜上方にまっすぐ緩やかにひらく桶状のものである。68は外方へ緩やかに膨らみ丸みを帯びた浅い体部をもつものである。底部には1条の突帯があり、体部上端は2条の突帯の間に雷文の刻印を連続して押すものである。ほかに青磁碗(59・60)の口縁部片がある。



第32図 遺構外出土土器実測図 (1/4)

48 出土遺物

造構外出土遺物（第32図、図版16-2） 遺物包含層から出土した土器である。土師器には皿（69・70）・紅壺（71）・高杯（72）などがある。皿は緩やかに外反する口径8.4cmもの（69）と口縁部が直線的に立ち上がりナデの部分が弱く外反して口縁端部を丸くおさめるもの（70）



第33図 瓦・煉瓦実測図 (1/4)

がある。前者は14世紀前半で、後者は15世紀末～16世紀前葉のものである。紅壺(71)は灰色の色調で外面指押さえのもので桃山時代ごろのものであろう。高杯(72)は脚部片で7面とりのもので、わずかに残る杯部には角閃石を多く含む生駒西麓産の土が使われており、珍しい。平安時代のものである。

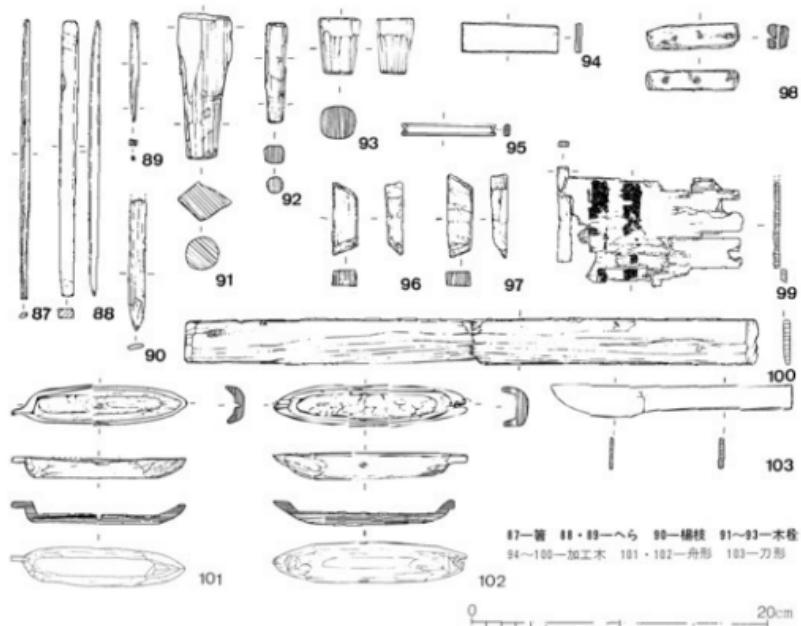
須恵器には鉢(73)・壺(74)・こね鉢(75)がある。鉢(73)はいわゆる鉄鉢で外面はケズリの後丹念にヘラミガキを行っている。こね鉢(75)は口縁部片で、いわゆる東播系のもので14世紀の特徴をもつ。

瓦器には椀(76)・浅鉢(77)・茶釜(78)などがある。瓦器椀(76)は底部に粘土をすりつけただけで内面ヘラミガキも粗く、橋本編年IV-2期に相当する。浅鉢(77)は前記の68と同様のものである。緑釉陶器には椀(79)・皿(80)がある。椀(79)は軟質系、皿(80)は硬質系のもので、いずれも平安時代のものである。ほかに青磁があり、口縁部外面に沈線をもつものや外面に弁先の丸い蓮弁文をもつものがある。

(2) 土製品(第33図)

土製品には瓦と煉瓦などがある。

瓦には軒丸瓦(81)と丸瓦(82・83)のほかに平瓦がある。81は三巴文軒丸瓦で、左に巻き



第34図 井戸S E 11出土木製品実測図 (1/4)

50 出土遺物

込む巴を内区に、珠文を外区に配する。珠文帯の内側に圈線がある。丸瓦には玉縁が付くもの

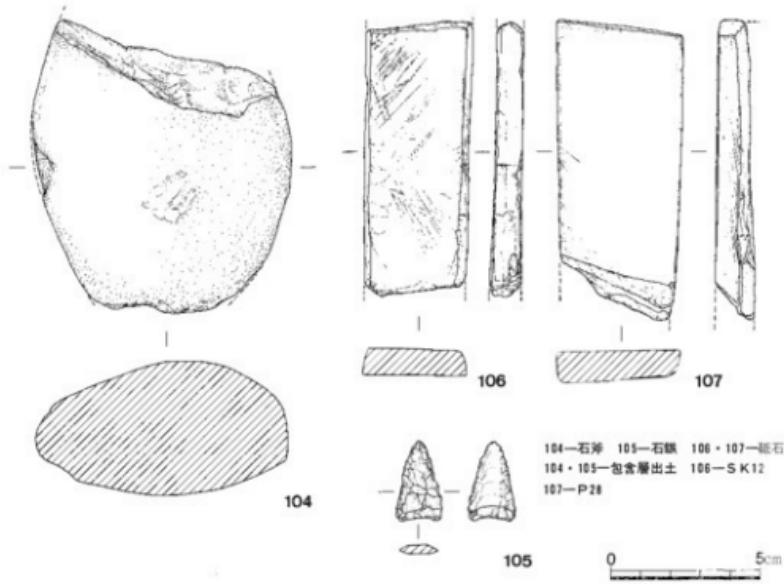
(82) がある。平瓦はS X04から多く出土しているが、それらは調整が不明なもの1点を除き、7点とも凹面に布目压痕、凸面に縄目叩きをもつものである。

煉瓦は形や大きさにより5種類に分けられる。角形のもの(84)は横10.5×縦6.3×厚さ6.8cmの1種で、側面に「大角」の線刻をもつものがある。板形のものは横14×縦16.5以上×厚さ6.5cm、横12.5以上×縦12以上×厚さ5.1cm、横11.8×縦14以上×厚さ4.3cm、横7.5×縦9×厚さ2cmの4種がある。

(3) 木製品 (第34図、図版16-3)

木製品はすべて井戸S E11から出土したもので、生活用具では箸(87)・楊枝状のもの(89)・木栓(91~93)があり、生産用具では竹製のへら(90)がある。信仰・呪術具には舟形(101・102)・刀形(103)の形代がある。このほか加工木(88・94~100)がある。99は薄い板に2条の墨線がある。

(4) 石製品 (第35図)



第35図 石製品実測図 (1/2)

石斧（104）は花崗岩製で、石鎌はサスカイト製で、いずれも弥生時代のものである。砥石（106・107）は泥岩製で使用痕が残るもので、中世の所産と考えられる。

4 ま と め

今回の調査では、創建当初の海印寺跡に関する遺構は検出されなかったが、弥生時代から近代に至る遺構や遺物を確認することができた。特に中世の遺構が検出されたことは寂照院や海印寺の消長を知る上で貴重な成果を得ることができた。

中世の遺構には13世紀から14世紀前半（I期）と15世紀末から16世紀前葉（II期）のものがある。前者には溝S D02と土坑S K12があり、後者には溝S D03・S D05・土坑S K06・S K07・井戸S E11などがある。とくに室町時代の遺構が多くみられるが、これらの遺構には鎌倉時代の遺物も比較的多く混入しており、周囲に鎌倉時代の遺構も多く存在していたことを示唆している。また、上記の遺構以外に柱穴跡が多く検出された。これらは調査の制約もあり残念ながら規模や構造を把握するには至らなかったが、寂照院の前面（とくに調査地東部）に多くの建物があったことを示している。さらに、調査地の西端で検出された落ち込みS X04は幅10m弱で深さ約2m以上の南北方向の流路と推定され、疊の堆積状況や出土遺物から13世紀末から14世紀初めに大量の疊で人為的に埋められ、16世紀初め頃完全に埋められている。このことは調査区の東南部で確認した整地状況（第4層による整地）と合わせて考えると、大規模な造成工事を行い、新たな土地利用を図ったことを物語っている。なお、文献史料では文永2年（1265）に後嵯峨上皇から荒廃していた海印寺の再興を図るよう院宣が出され、康永3年（1344）に寂照院の仁王門にある金剛力士像が造られており、平安時代後期以降衰退していた寺勢の回復が鎌倉時代にはかかれている。これらのこととは発掘調査で確認したI期の成果と時期的に符合しており、当時の様子の一端を知るものとして注目される。

また、中世の遺構に混じって平安時代の土師器や綠釉陶器、土馬等が散見できたことは創建当初の海印寺を探っていく上でも興味深く、中世海印寺の実態解明と合わせて、今後周辺での調査が待たれるところである。

注1) 土器の分類整理や木製品などの実測にあたっては、吉川文乃・上野恵己などの協力を得た。

2) 井ヶ田良治他「寂照院総合調査報告書」「長岡京市報告書」第16冊 1985年

3) 原秀樹「海印寺跡第1次調査概要」「長岡京市報告書」第29冊 1992年

4) 橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器様相」「高槻市文化財年報」昭和63・平成元年度 1991年

5) 菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」「国立歴史民俗博物館研究報告」第19集 平成元年（1989）3月

52 遺物観察一覧表

付表2 遺物観察一覧表(土器類)

遺物番号	押印番号	種別	器形	遺構層位	法量(cm)		残存度	備考	図版番号
					口径	器高			
1	第29回	土師器	皿	S X04第1層	7.0	1.9	1/3		15-1
2	第29回	土師器	皿	S X04第1層	11.6	2.4	口縁部1/3		15-1
3	第29回	土師器	皿	S X04第1層	13.0	1.5	1/11		15-1
4	第29回	土師器	皿	S X04第4層	14.4	2.9	1/6		15-1
5	第29回	瓦器	皿	S X04第1層	7.6	1.2	1/6		
6	第29回	瓦器	皿	S X04第1層	7.8	1.1	1/6		
7	第29回	瓦器	皿	S X04第1層	9.8	1.4	1/6		15-1
8	第29回	瓦器	皿	S X04第1層	10.0	1.2	口縁部1/6		15-1
9	第29回	瓦器	椀	S X04第1層	14.0	4.5	1/6弱		15-1
10	第29回	瓦器	羽釜	S X04第1層	16.8	(2.5)	口縁部1/4		15-1
11	第29回	瓦器	羽釜	S X04第1層	口縁部小片		15-1
12	第29回	瓦器	羽釜	S X04第1層	19.0	(4.7)	口縁部1/4		15-1
13	第29回	瓦器	三脚羽釜	S X04第1層	脚部		15-1
14	第29回	土師器	羽釜	S X04第1層	27.6	(4.65)	口縁部1/4		15-1
15	第30回	土師器	皿	S E11第2層	7.2	1.4	1/4		
16	第30回	土師器	皿	S E11第3層	6.9	1.4	3/4	器形かなりの歪み	
17	第30回	土師器	皿	S E11第3層	7.2	1.6	完形	器形の歪み	15-2
18	第30回	土師器	皿	S E11第2層	6.9	1.4	完形	ハケ目あり、器形の歪み	15-2
19	第30回	土師器	皿	S E11第2層	6.9	1.4	完形	ハケ目あり、器形の歪み	
20	第30回	土師器	皿	S E11第3層	7.4	1.55	完形	器形の歪み	15-2
21	第30回	土師器	皿	S E11第3層	7.2	1.7	ほぼ完形	口縁の一部に煤付着	15-2
22	第30回	土師器	皿	S E11第3層	7.4	1.5	1/2	内面ハケ目あり、器形の歪み	
23	第30回	土師器	皿	S E11第3層	8.4	1.8	1/2強	内面ハケ目あり、器形の歪み	
24	第30回	土師器	皿	S E11第2層	9.2	1.9	1/3	ハケ目あり、器形の歪み	
25	第30回	土師器	皿	S E11第3層	10.2	2.1	1/6		
26	第30回	土師器	皿	S E11第3層	10.35	2.4	完形	内面ハケ目あり、器形の歪み	15-2
27	第30回	土師器	皿	S E11第4層	7.2	1.7	口縁部1/5欠損	ハケ目あり、器形の歪み	15-2
28	第30回	土師器	皿	S E11第4層	7.4	1.7	ほぼ完形	ハケ目あり	15-2
29	第30回	土師器	皿	S E11第4層	7.1	1.55	ほぼ完形		15-2
30	第30回	土師器	皿	S E11第4層	7.0	1.8	ほぼ完形	ハケ目あり	15-2
31	第30回	土師器	皿	S E11第4層	7.2	1.5	口縁部1/8欠損	ハケ目あり、器形の歪み	15-2
32	第30回	土師器	皿	S E11第4層	7.6	1.4	1/2強	ハケ目あり	
33	第30回	土師器	皿	S E11第4層	7.2	1.5	口縁部1/6欠損	ハケ目あり、器形の歪み	
34	第30回	土師器	皿	S E11第4層	9.0	1.45	ほぼ完形	灯明皿	15-2
35	第30回	土師器	皿	S E11第4層	9.0	1.6	口縁部1/8欠損	見込みに暗紋様あり	15-2
36	第30回	土師器	皿	S E11第4層	15.0	2.3	1/3		
37	第30回	土師器	皿	S E11第4層	14.6	3.1	口縁部1/6欠損		15-2
38	第31回	土師器	皿	S X14	7.0	0.9	1/4		
39	第31回	土師器	皿	S X14	7.4	1.1	1/5		
40	第31回	土師器	皿	S X14	8.2	1.2	1/4		

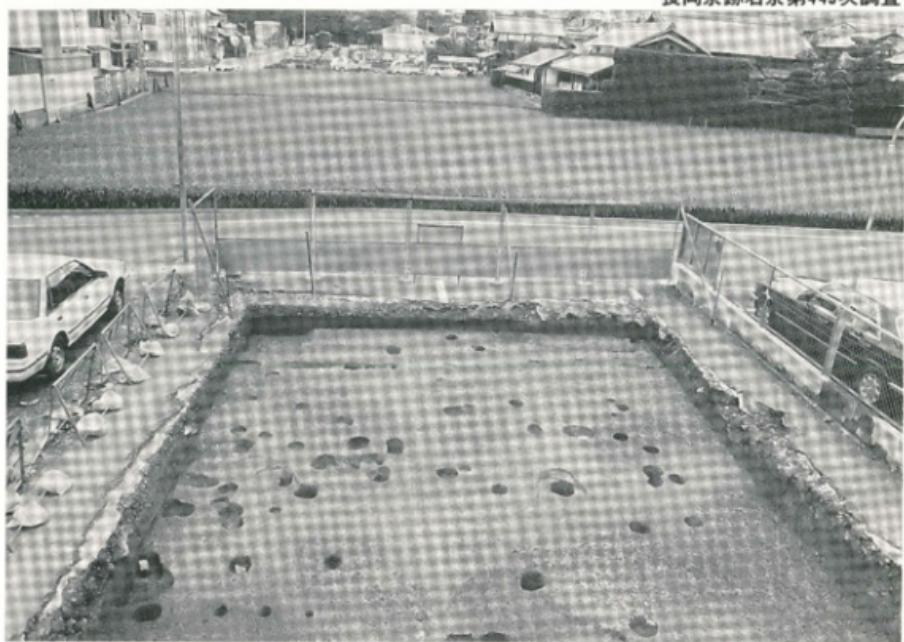
遺物番号	攝取番号	種別	器形	遺構層位	法量(cm)		残存度	備考	図版番号
					口径	器高			
41	第31回	土師器	皿	P 4	9.0	1.9	小片		
42	第31回	土師器	皿	P 4	10.0	1.55	1/6		
43	第31回	土師器	皿	S K07第2層	10.2	(1.8)	1/8		
44	第31回	土師器	皿	S D05下層	7.2	1.3	5/8		
45	第31回	土師器	皿	P 56	6.4	1.7	ほぼ完形		
46	第31回	土師器	皿	S K06	6.8	1.75	3/8	ハケ目あり 口縁の一部に煤付着	
47	第31回	土師器	皿	S K06	7.0	1.4	1/2弱	ハケ目あり	
48	第31回	土師器	皿	S X14	7.1	1.4	1/4		
49	第31回	土師器	皿	S K07上層	7.0	(1.4)	1/3		
50	第31回	土師器	皿	P 56	7.2	1.9	1/2		
51	第31回	土師器	皿	P 56	8.6	2.3	1/5		
52	第31回	土師器	皿	P 56	8.4	2.1	ほぼ完形	灯明皿	
53	第31回	土師器	椀	S K14	11.5	3.3	1/4		
54	第31回	土師器	皿	S D05上層	14.6	2.7	1/2弱		
55	第31回	土師器	皿	P 56	14.8	3.25	1/5		
56	第31回	土師器	皿	P 56	14.4	2.7	1/4		
57	第31回	土師器	皿	P 56	15.0	2.6	1/5		
58	第31回	土師器	鍋	P 19	...	(2.7)	小片	断面のみ	
59	第31回	輸入磁器	碗	P 28	...	(2.9)	小片	青磁	
60	第31回	輸入磁器	碗	東トレ第3層	13.6	(3.8)	小片	青磁	
61	第31回	瓦器	椀	S K12	12.2	4.12	口縁部1/16欠損	内面暗紋あり	
62	第31回	瓦器	椀	S X14	12.0	(4.7)	小片		
63	第31回	瓦器	椀	S K07第2層	12.2	(3.8)	1/6		
64	第31回	瓦器	椀	S X14	7.5	(2.3)	小片		
65	第31回	瓦器	羽釜	S K08	小片のみ		
66	第31回	瓦器	深鉢	P 48	...	(7.5)	底部1/4	底径30.6cm	
67	第31回	瓦器	風炉	S X14	...	(9.8)	底部1/8		16-1
68	第31回	瓦器	浅鉢	S D05上層	小片のみ	火鉢	
69	第32回	土師器	皿	東トレ第4層	8.4	1.3	3/4		
70	第32回	土師器	皿	西グリッド	16.2	2.5	3/4		
71	第32回	土師器	紅豈	東トレ第3層	2.5	2.5	1/4		
72	第32回	土師器	高杯	南トレ第4層	脚部少々	杯部に生駒西鏡座の土を使用、七面体	
73	第32回	須恵器	鉢	東トレ第4層	18.6	(8.3)	1/2弱		16-2
74	第32回	須恵器	壺	南トレ第4層	...	(5.0)	底径8.3cm		
75	第32回	須恵器	こね鉢	南トレ第4層	小片のみ	口縁外側に黒色の釉付着	
76	第32回	瓦器	椀	東トレ第3層	11.9	4.04	3/4弱		
77	第32回	瓦器	浅鉢	東トレ第3層	...	(3.3)	小片	火鉢	
78	第32回	瓦器	蓋	南トレ第3層	14.2	(3.5)	口縁部のみ		
79	第32回	綠釉	椀	北トレ第3層	15.2	(1.6)	小片		
80	第32回	綠釉	皿	東トレ第3層	...	(1.1)	底部小片	底径8cm	

54 遺物観察一覧表

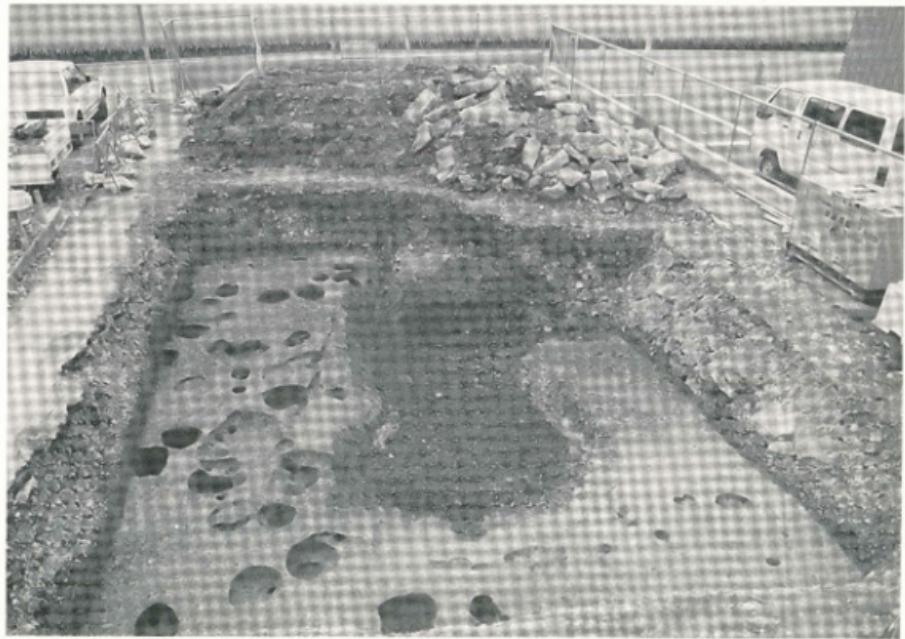
(土・木・石製品類)

遺物 番号	掲図 番号	品種	造構層位	寸法(cm)			残存度	備考	図版 番号
				長さ	幅	厚さ			
81	第33図	土製品 軒丸瓦	S X04第1層				瓦当小片		
82	第33図	土製品 丸瓦	北トレ第3層				小片		
83	第33図	土製品 丸瓦	S X04第1層						
84	第33図	土製品 煉瓦	S E01	10.9	6.5	6.95	完形	側面にヘラ書「大角」	
85	第33図	土製品 煉瓦	S E01	9.5	7.2	2.3	完形		
86	第33図	土製品 煉瓦	S E01	14.4	12.0	4.4	2/3		
87	第34図	木製品 箸	S E11第4層	18.1	0.55	0.4	完形		16-3
88	第34図	木製品 加工木	S E11第4層	18.4	1.0	0.6	完形		16-3
89	第34図	木製品 楊枝	S E11第4層	6.3	0.55	0.45	完形		16-3
90	第34図	木製品 へら	S E11第3層	(8.9)	1.1	0.35	1/2	竹製	16-3
91	第34図	木製品 木栓	S E11第4層	9.8	3.7	2.95	ほぼ完形		16-3
92	第34図	木製品 木栓	S E11第3層	6.7	1.4	1.2	完形		16-3
93	第34図	木製品 木栓	S E11第4層	3.7	2.8	2.5	完形		16-3
94	第34図	木製品 加工木	S E11第4層	6.5	1.95	0.4	完形		16-3
95	第34図	木製品 加工木	S E11第4層	6.3	0.8	0.45	完形		16-3
96	第34図	木製品 加工木	S E11第3層	4.9	1.5	1.2	完形		16-3
97	第34図	木製品 加工木	S E11第3層	5.5	1.6	1.1	完形		16-3
98	第34図	木製品 加工木	S E11第3層	(6.4)	1.65	1.4	両端欠損	各面に交互に穿孔	16-3
99	第34図	木製品 加工木	S E11第4層	(12.7)	(7.4)	0.35	部分のみ	2条の墨線(幅1.2cm)	
100	第34図	木製品 加工木	S E11第4層	38.8	3.05	0.45	ほぼ完形		
101	第34図	木製品 舟形	S E11第4層	11.9	2.6	1.4	ほぼ完形		16-3
102	第34図	木製品 舟形	S E11第4層	13.1	2.7	1.9	ほぼ完形		16-3
103	第34図	木製品 刀形	S E11第4層	16.2	2.1	0.35	完形		16-3
104	第35図	石製品 石斧	東トレ第4層	(9.9)	8.8	4.4	上半部欠損	花岡岩	
105	第35図	石製品 石鎌	東トレ第3層	2.65	1.6	0.35	完形	サヌカイト	
106	第35図	石製品 砥石	S K12	9.2	3.6	0.9	ほぼ完形	泥岩	
107	第35図	石製品 砥石	P28	(10.05)	4.3	1.35	下端部欠損	泥岩	

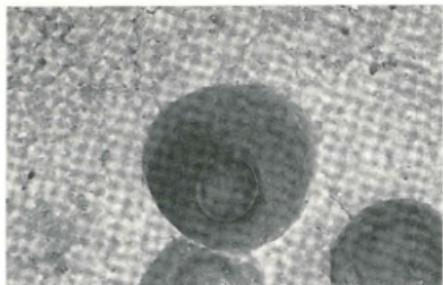
図 版



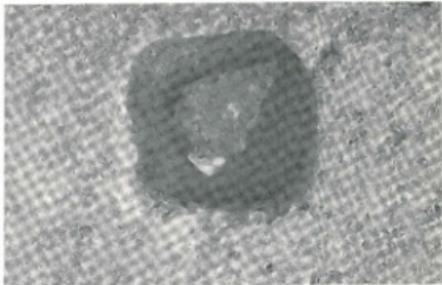
1 西調査区全景（東から）



2 東調査区全景（東から）



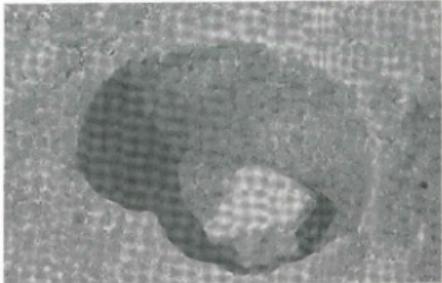
1 柱穴P 10瓦器碗出土状況（東から）



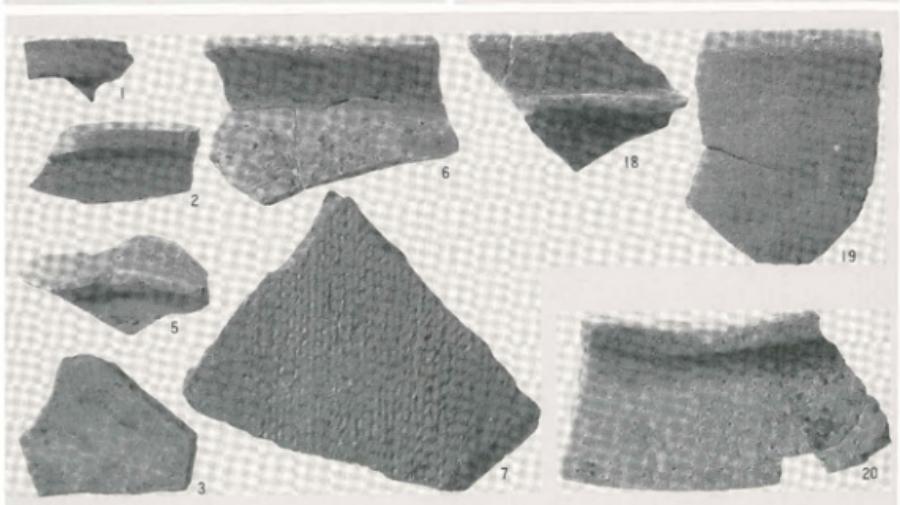
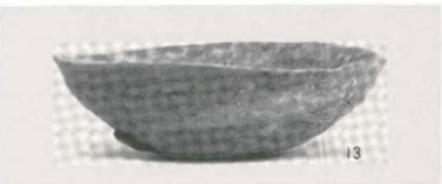
3 柱穴P 7石出土状況（南から）



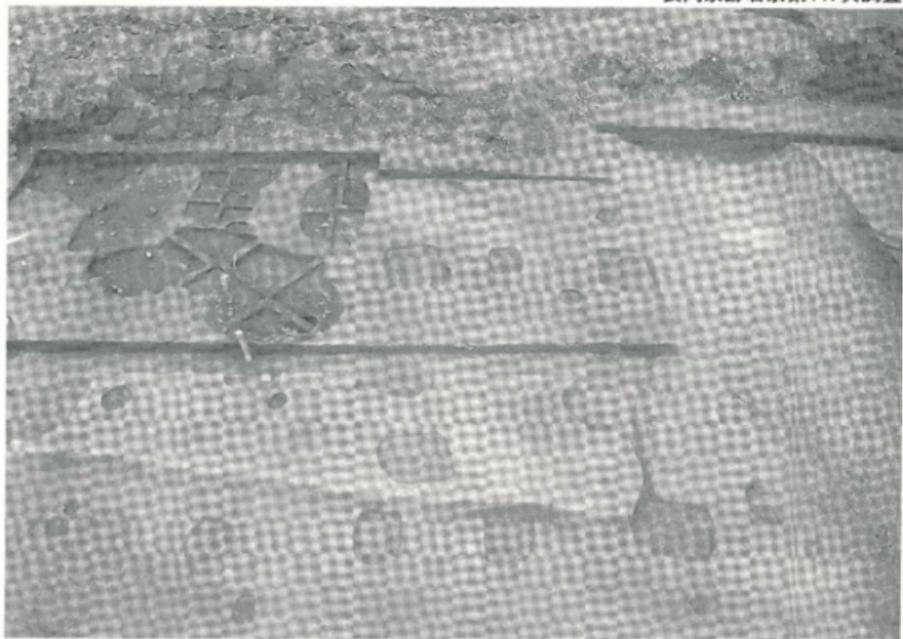
2 柱穴P 10土師器皿出土状況（東から）



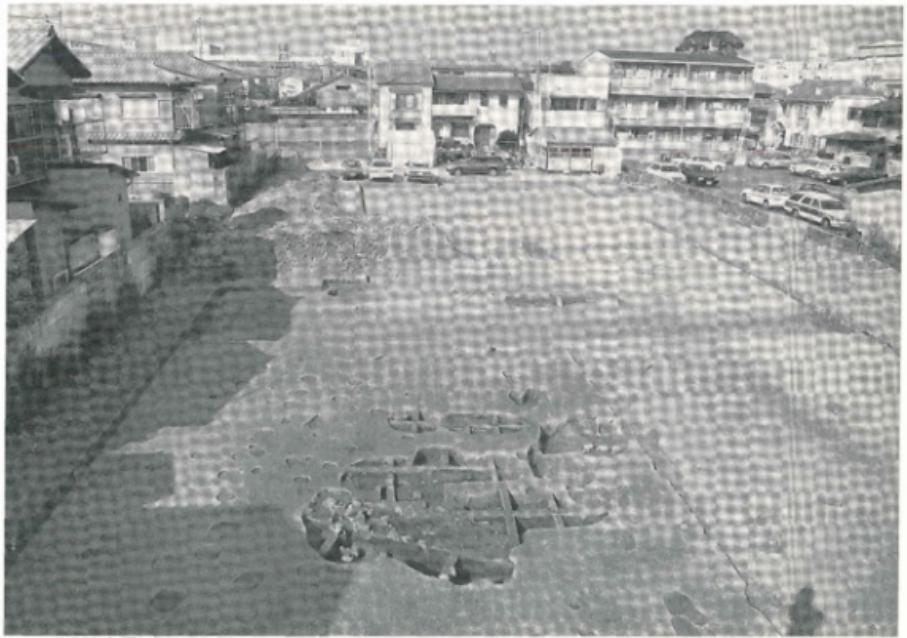
4 柱穴P 25石出土状況（東から）



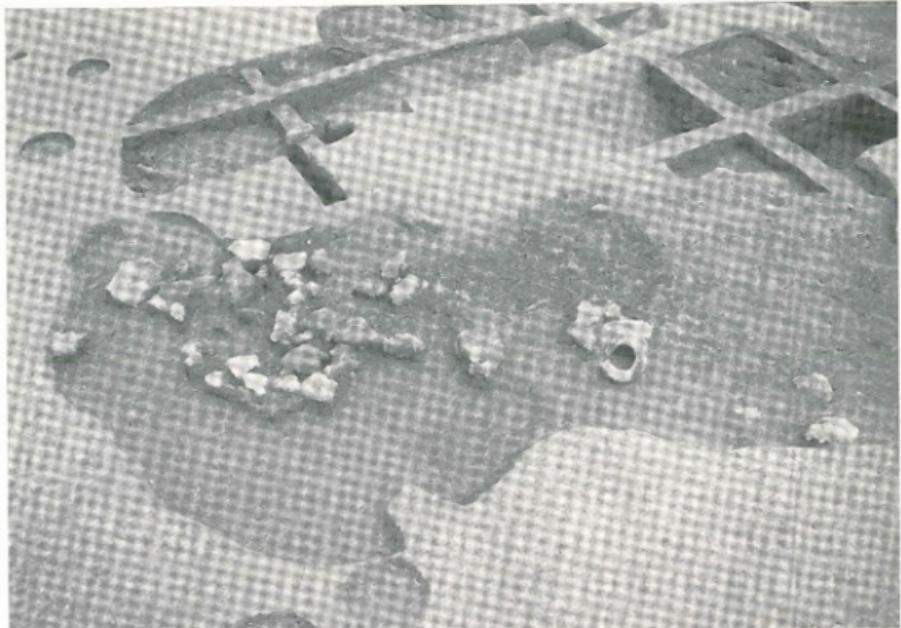
5 出土遺物



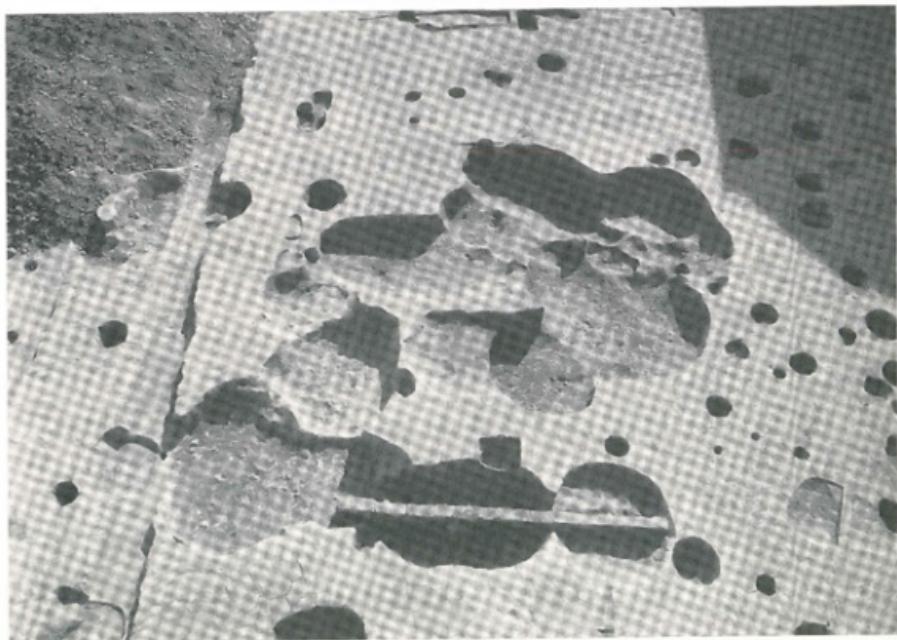
1 拡張前の炉跡群と掘立柱建物 S B44146 (東から)



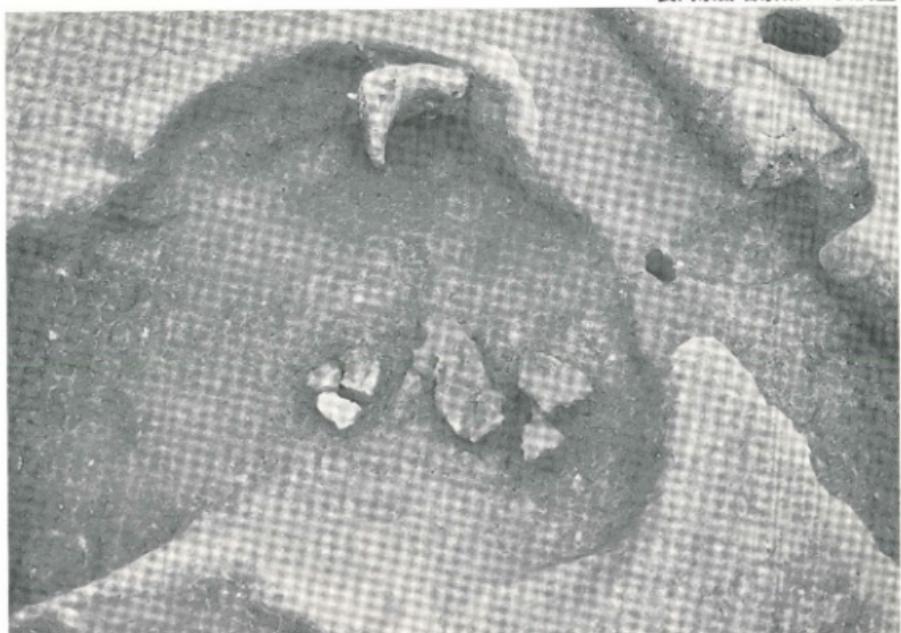
2 調査地全景 (南から)



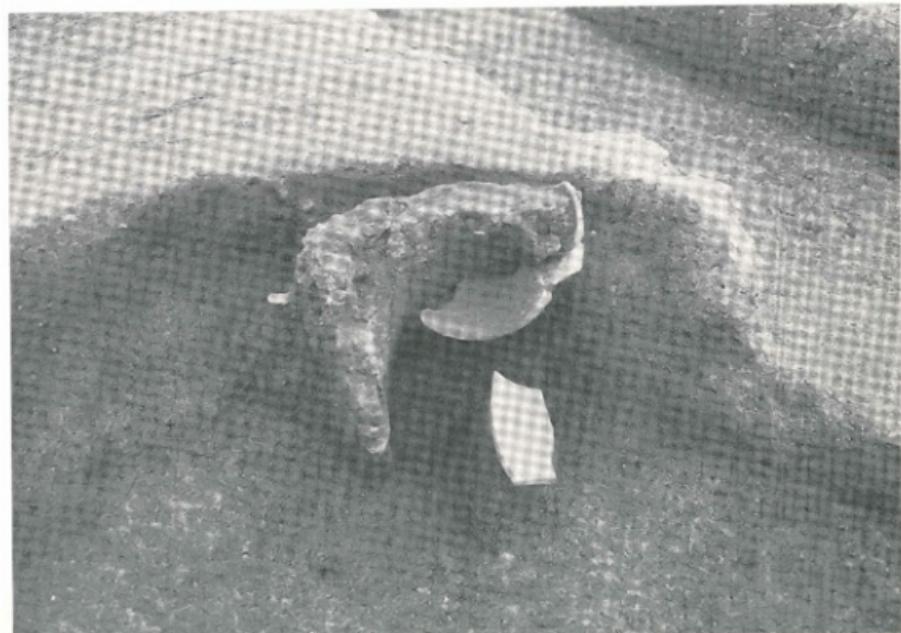
1 炉 S X 44736-A・B 検出状況（南西から）



2 炉跡群完掘状況（北から）



1 炉 S X44729-B (南西から)



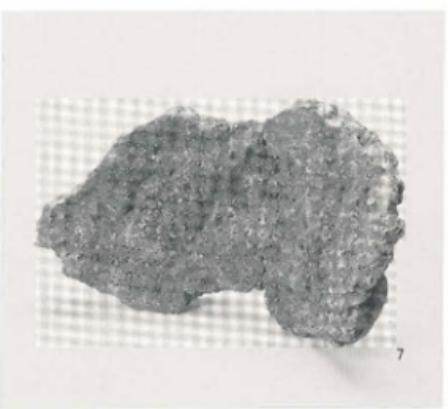
2 炉 S X44729-B の炉体 (南西から)



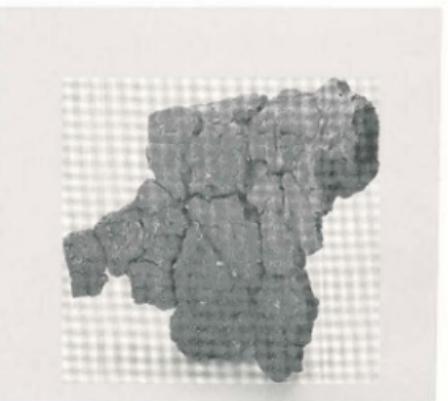
1 炉S X44729-B出土轆羽口



2 炉S X44736-出土炉壁



3 炉S X44729-B出土炉壁と炉体

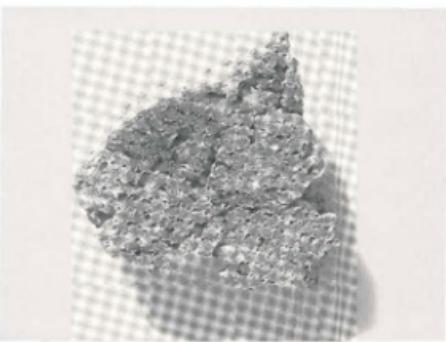




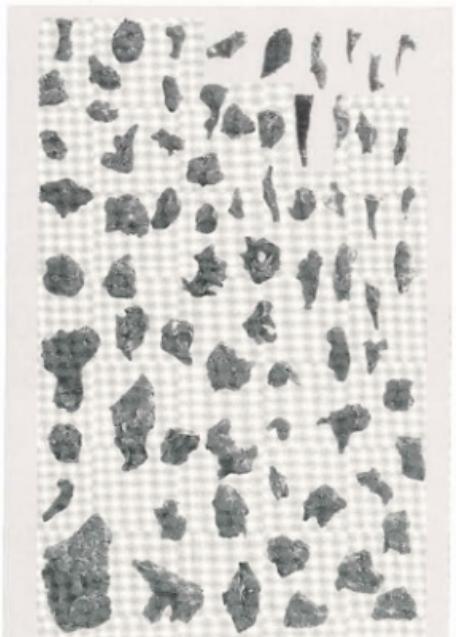
1 炉S X 44729-B・4層出土ガラス質



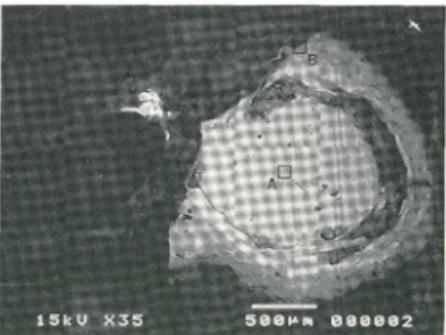
3 炉跡群出土ガラス質



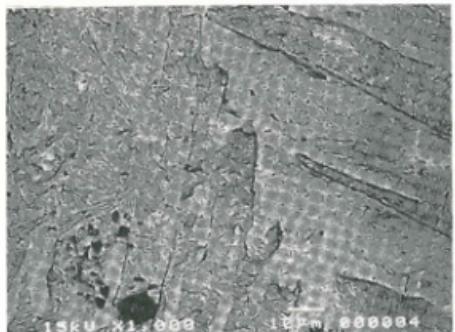
4 試料原体（炉S X 44729-B出土）



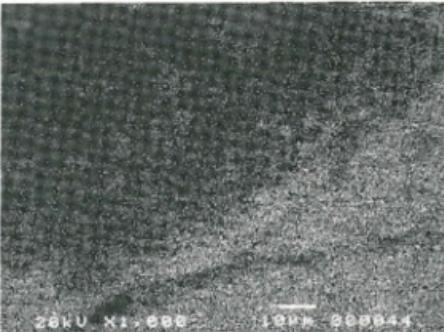
2 炉S X 44729-B・4層出土のスラグ



5 分析試料



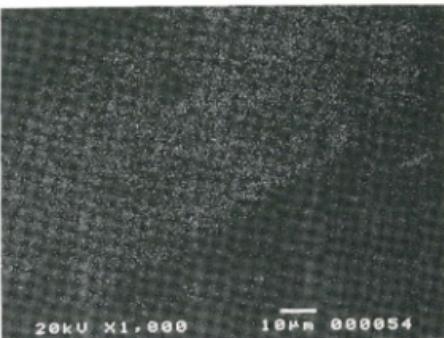
1 部分Aの拡大



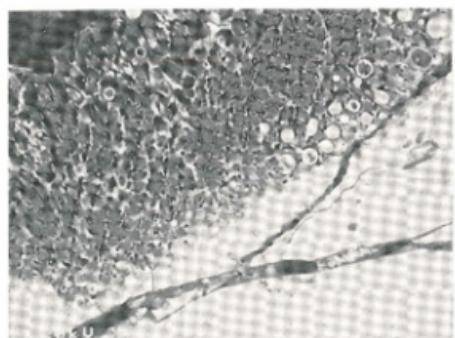
4 部分Bの鉄の分布



2 部分Bの周辺



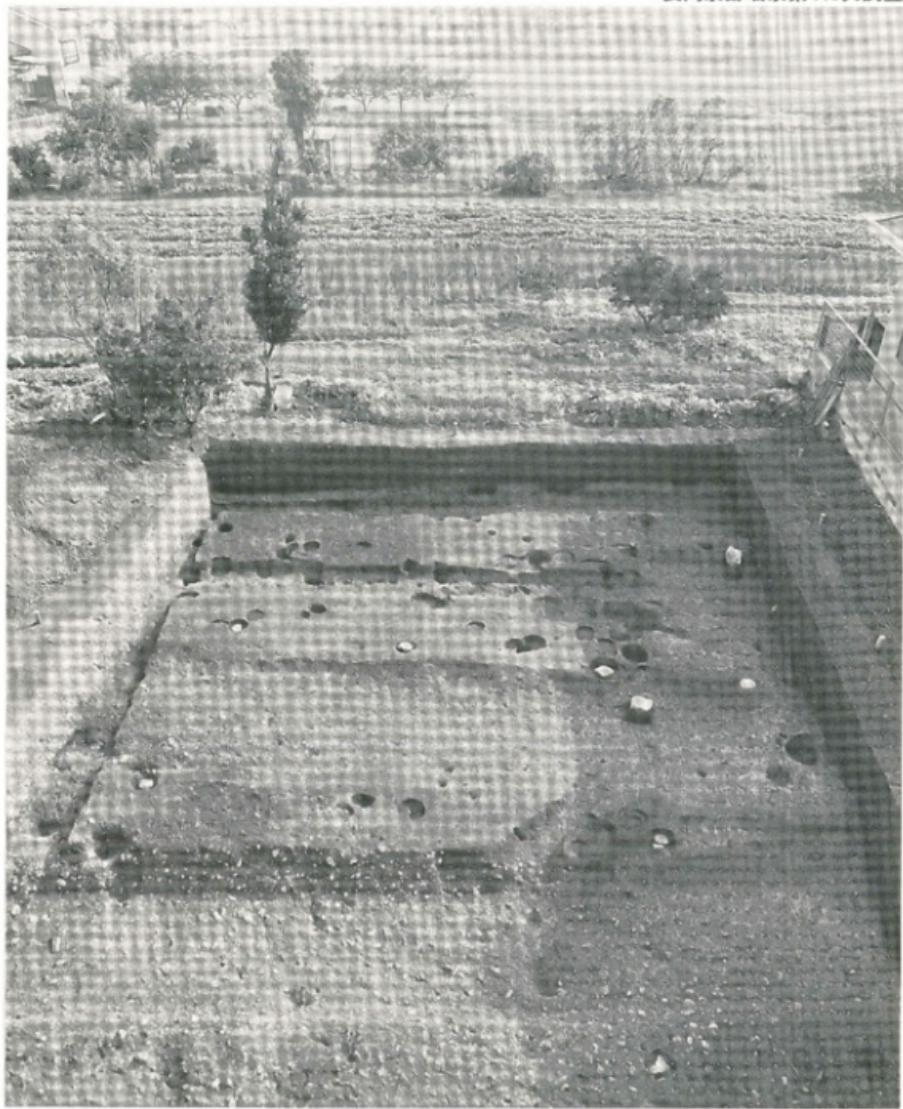
5 部分Bの珪素の分布



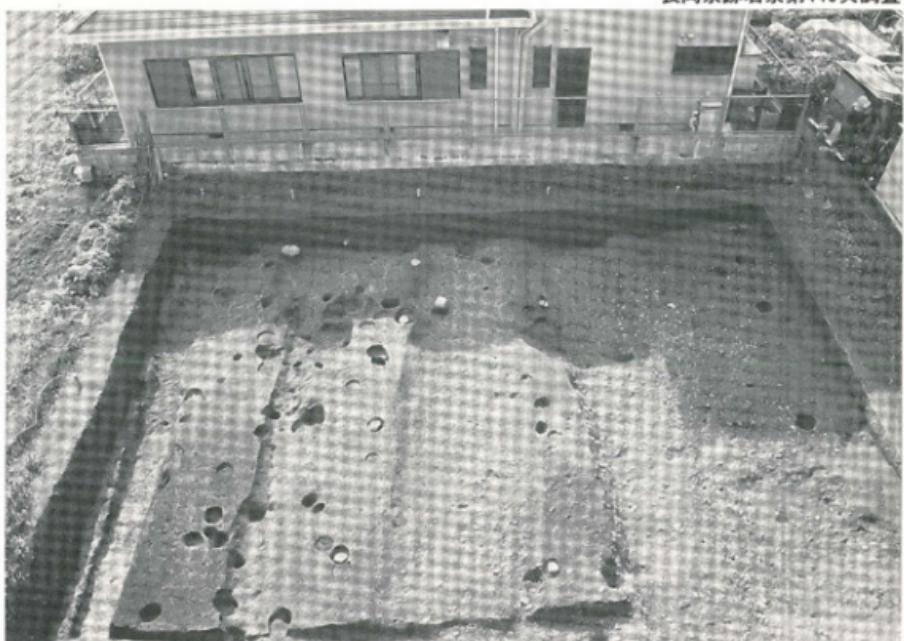
3 部分Bの拡大



6 部分Bのカルシウムの分布



調査地全景（西から）



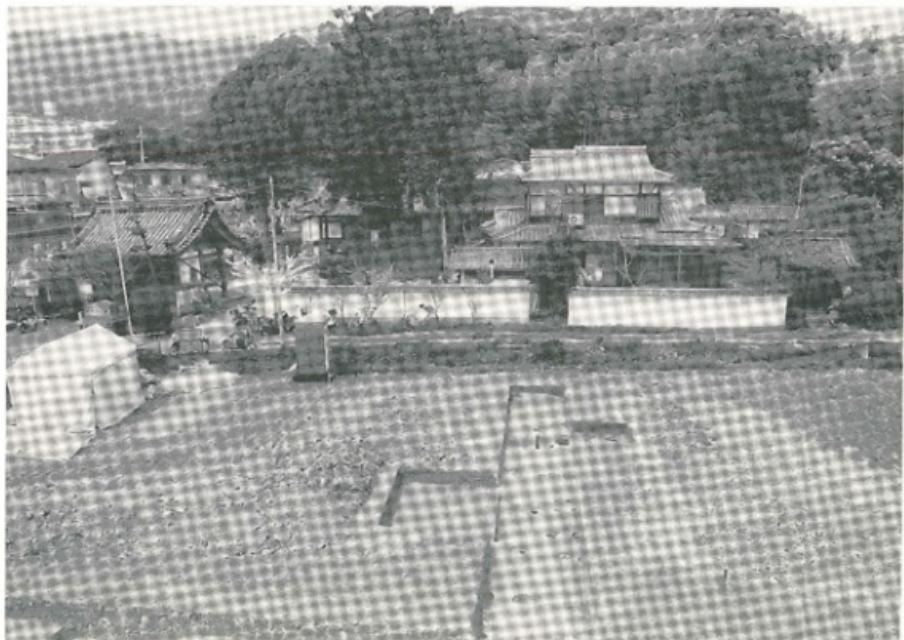
1 調査地全景（北から）



2 調査地全景（東から）

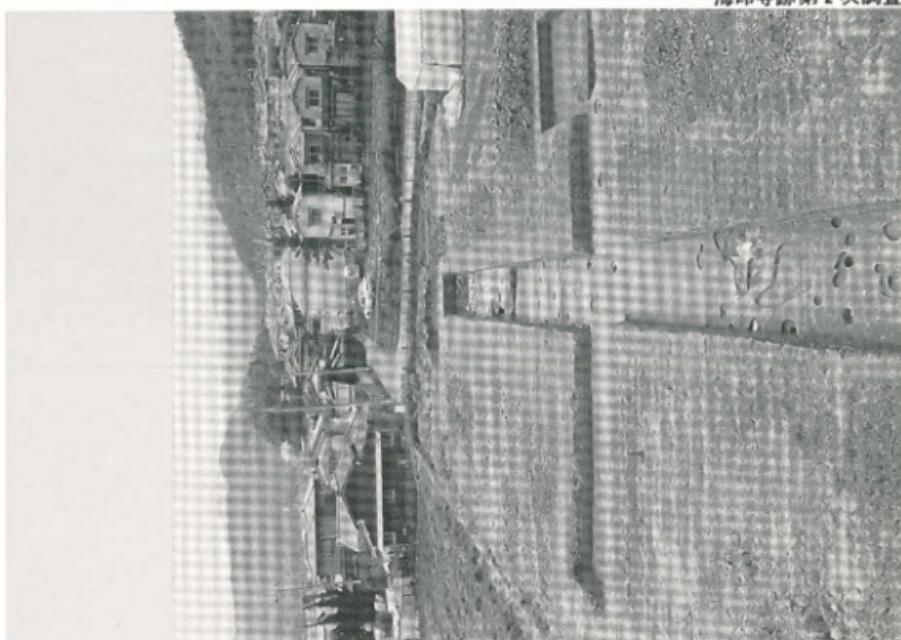


1 調査地全景（南東から）

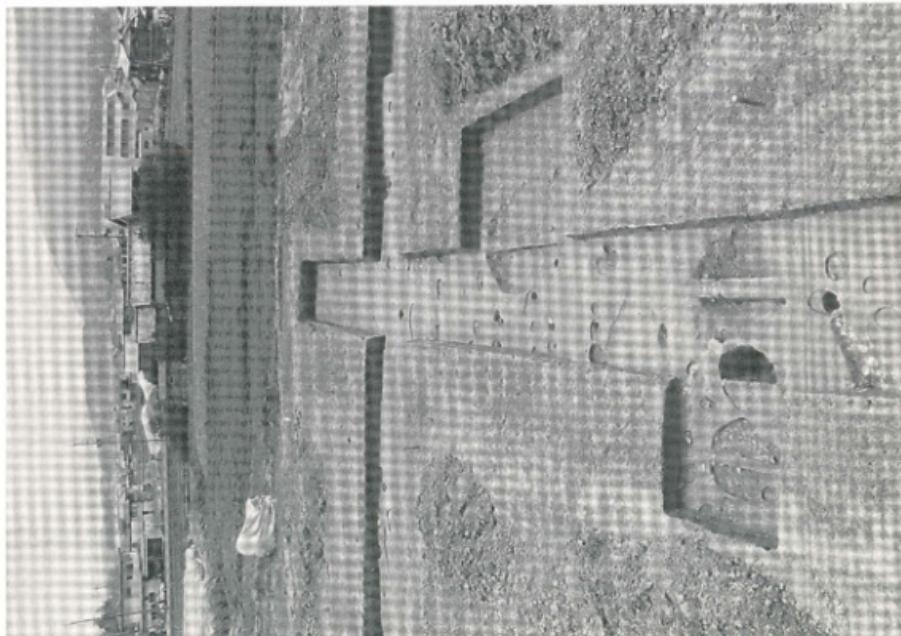


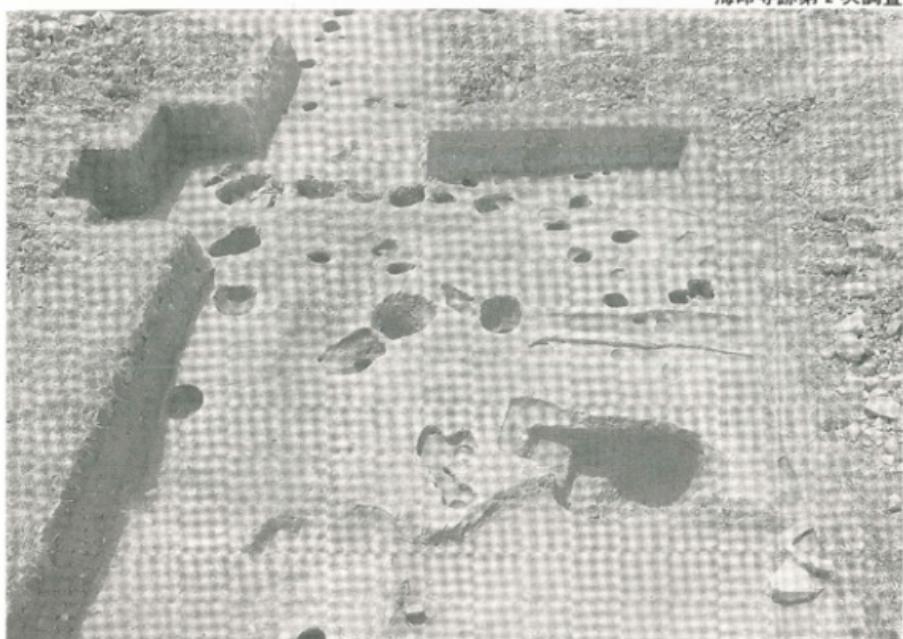
2 調査地全景（南から）

2 東・西トレンチ（東から）

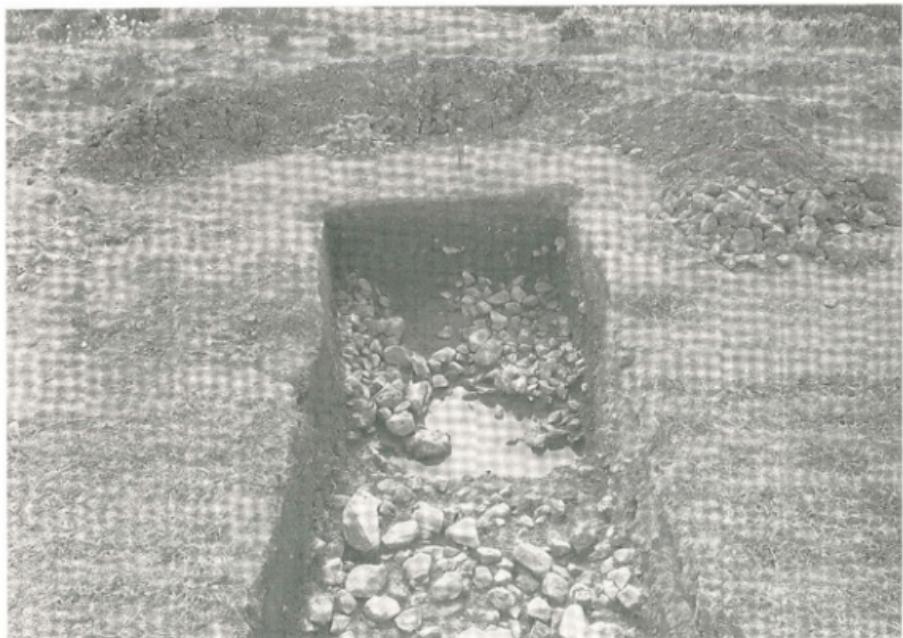


1 南・北トレンチ（北から）

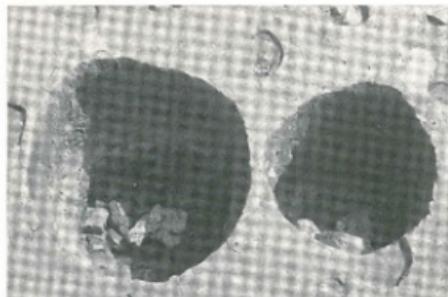




1 東トレンチ東部（東から）



2 落ち込みS X04砾群検出状況（東から）



1 井戸S E11(左)・土坑SK06(右)



2 柱穴P4(南から)



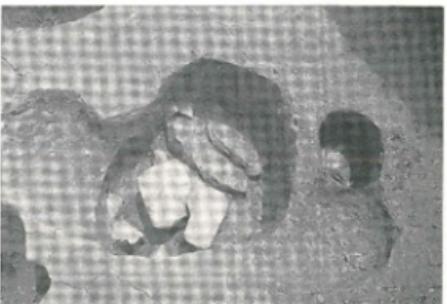
3 柱穴P63(南から)



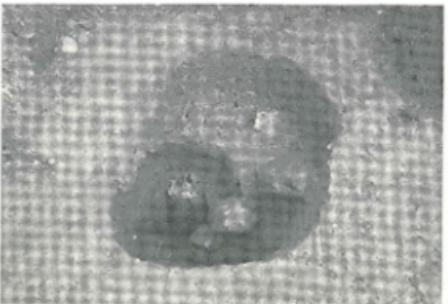
4 柱穴P69(東から)



5 柱穴P74(北から)



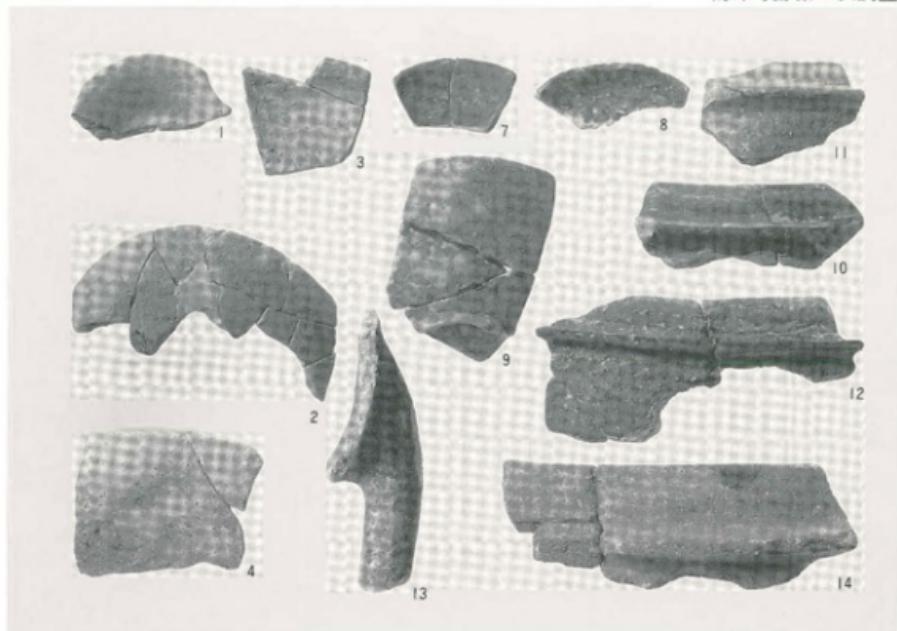
6 柱穴P75(東から)



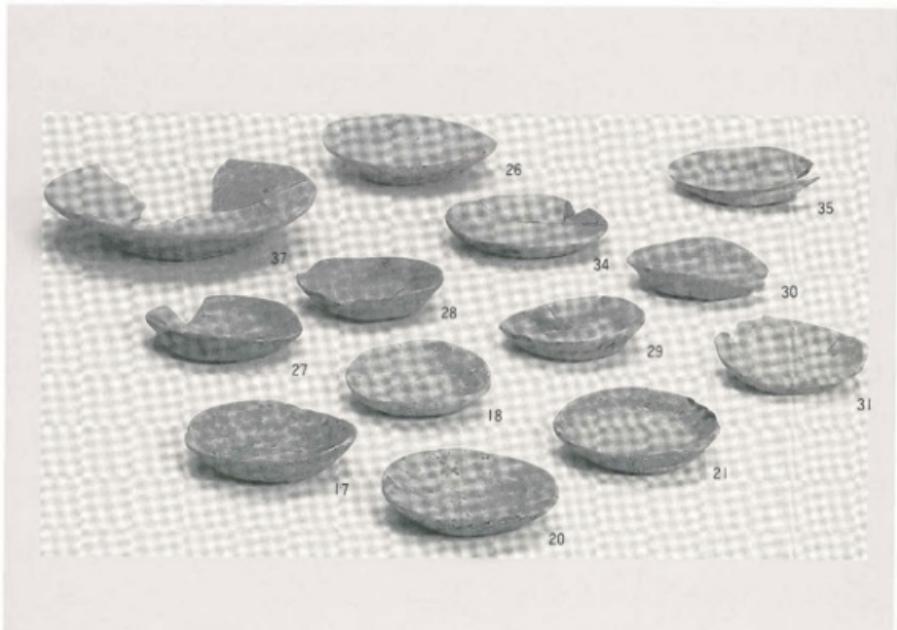
7 柱穴P76(北から)



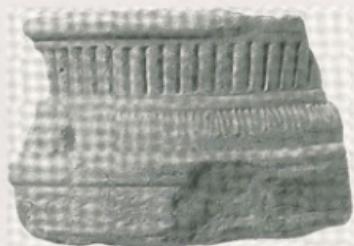
8 柱穴P77(北から)



1 落ち込み S X04出土土器



2 井戸 S E11出土土器



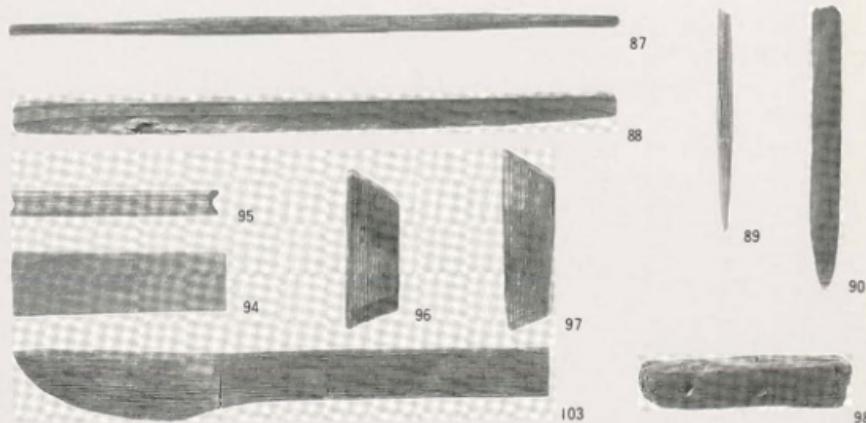
67

1 瓦器風炉



73

2 須恵器鉢



87

88

89

90

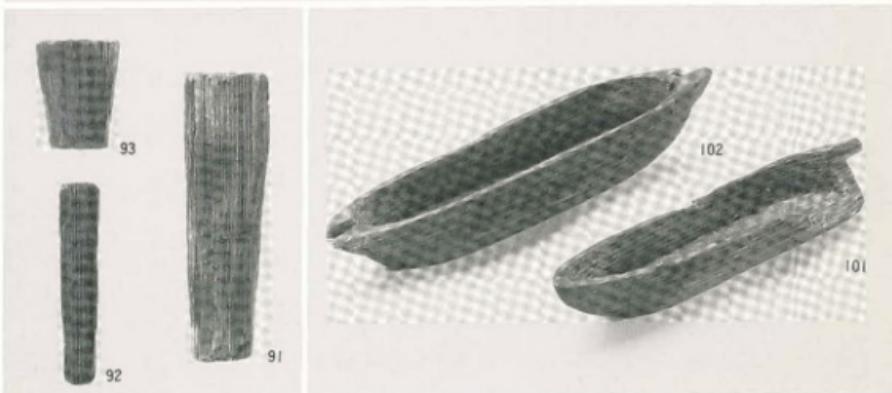
95

96

97

103

98



93

91

92

102

101

3 井戸S E 11出土木製品

長岡京市文化財調査報告書 第32冊

発行日 平成6年3月31日
編集・発行 長岡京市教育委員会
〒617 京都府長岡京市開田一丁目1番1号
電話 075-951-2121
印 刷 株式会社 国書印刷同朋舎
〒600 京都市下京区中堂寺鍵田町2
電話 075-361-9021~4 (代)